

宝徳本系統『保元物語』本文考続貂（上）

原 水 民 樹

宝徳本系統（金刀本系統とも称される）に属する『保元物語』諸本は、昭和五十二年、大井善壽氏により、最終的に宝徳本系列・陽明本系列・松井本系列・金刀本系列の四系列に細分・整理され、今日に至る。ただ、その後も該系統に属すると判断される伝本の出現が続いている。こうした状況下、系統全本を再整理する必要性を感じ、小稿の作成を思い立った。結果としては、大井氏の四系列細分の穩当であることを確認し、それにいくほどの知見を加えるものとなろう。

本文引用にあたっては、必要と思われる場合を除いて振り仮名は省略する。なお、参考として本文末（一）内に、小学

館本における所載頁・行を示す。例えば（1—1）は、該本文が第一頁第一行にあるか、もしくはそこから始まることを示す（該本文が存在しない場合は相当部を示す）。また、影印本が刊行されている伝本については、本文末（一）内に「影」の表示のもと同要領で所載頁・行を示す。それら影印本は次の通り。

○学習院図書館蔵九条家旧蔵本（日本古典文学影印叢刊『保元物語』平治物語』日本古典文学会 昭和六十三年）

○東京大学国語研究室蔵『保元記』（東京大学国語研究室資料叢書『保元記 平治物語』汲古書院 昭和六十一年）

○陽明文庫藏宝徳三年奥書本・陽明文庫藏三卷本（陽明叢書

『保元物語』思文閣 昭和五十年）

○彰考館文庫藏京師本・同藏等覺院本（古典研究会叢書『保

元物語』汲古書院 昭和四十七、四十九年）

○九州大学附属図書館支子文庫藏本（在九州国文資料影印叢

書『保元物語』 昭和五十四年）

稿者の調査が及んだ限りでは、その全文もしくは本文の大半が宝徳本系統に属すると見なされる伝本は左掲の如くなる。各伝本の末尾（一）内は小稿で使用する略称である。

*を冠した伝本は大井氏論文では扱われていないが、天・早・文以外はかつて採り上げたことがあり、⁽²⁾ 論述がそれらと重なることもある。旧稿を併読していただければ幸いである。

（宝徳本系列）

今治市河野美術館藏斑山文庫旧藏本（河）

学習院図書館藏九条家旧藏本（学）

*九州大学附属図書館支子文庫藏本（支）

*中京大学図書館藏本（中）

東京大学国語研究室蔵『保元記』（東）

前田尊経閣文庫藏伝積善院尊雅筆本（前）

陽明文庫藏宝徳三年奥書本（宝）

今治市河野美術館藏大型本（京師本系統―永積分類）（今）

彰考館文庫藏京師本（京師本系統―永積分類）（彰）

静嘉堂文庫藏旧本（京師本系統―永積分類）（静）

前田尊経閣文庫藏大型本（京師本系統―永積分類）（尊）

（陽明本系列）

*糸魚川市民図書館藏本（糸）

京都大学国文研究室蔵『保元記』（国）

*佐賀県立図書館藏本（佐）

大東急記念文庫藏屋代弘賢書入本（大）

*天理大学附属天理図書館藏残欠本（全三卷中、中卷欠）（天）

*仁和寺藏本（上巻頭より東三条殿行幸記事まで）（仁）

*原水藏彩色絵入本零葉（零）

*広島大学図書館中央図書館藏米子市立米子図書館旧藏本

（広）

陽明文庫蔵三巻本（陽）

正木信一氏蔵本（正木本系統—永積分類）（正）（未見）

宮内庁書陵部蔵平仮名交本（正木本系統—永積分類）（宮）

*国文学研究資料館蔵宝玲文庫旧蔵本（資）

（松井本系列）

九州大学国文研究室蔵本（九）

*國學院大學蔵本（院）

*実践女子大学図書館蔵常磐松文庫蔵本（実）

静嘉堂文庫蔵玄圃斎旧蔵本（玄）

静嘉堂文庫蔵松井簡治旧蔵本（松）

天理大学附属天理図書館蔵昭和十五年印記本（昭）

龍門文庫蔵本（上巻頭より中巻の法勝寺焼き討ち不許の記

事まで）（龍）

*早稲田大学図書館九曜文庫蔵残欠本（全三巻中、下巻のみ

存）（早）

*早稲田大学図書館蔵津田葛根識語本（津）

蓬左文庫蔵平仮名交本（上巻頭より後白河勢出撃記事まで）

（蓬）

神宮文庫蔵賢木園文庫旧蔵本（上巻頭より後白河勢出撃記

事まで）（神）

*原水蔵本（全二巻中、上巻のみ存。上巻頭より後白河勢出

撃記事まで）（原）

（金刀本系列）

学習院大学国文研究室蔵本（全三巻中、上巻欠）（習）

金刀比羅宮図書館蔵本（金）

彰考館文庫蔵等覚院本（全三巻中、中巻のみ）（等）

天理大学附属天理図書館蔵粘葉本（理）

*東京国立博物館蔵平仮名交本（博）

内閣文庫蔵袋綴本（全三巻中、上巻欠）（内）

*早稲田大学図書館九曜文庫蔵文久二年本（文）

（京師本系統・正木本系統並びに前・資・佐・大・院に
は、京図本系統もしくは流布本系統の為朝説話が追補
されているが、当該部は考察の対象外である）

一、宝徳本系列の諸本

現在、本文のすべてもしくはその大部分が宝徳本系列に属すると判断される伝本は河・学・支・中・東・前・宝・今・彰・静・尊の十一本である。それらは、その親疎関係からさらに宝・東・彰・中（今・静・尊の三本は彰を祖本とする）とが犬井善壽氏により報告されているので彰をもって代表させる）のグループと河・学・支・前のグループに分かつことが可能である。この二グループ（便宜的に、宝グループ・河グループと仮称する）間に見られる比較的規模の大きい異同を次に示す。本文引用にあたっては、宝グループは宝、河グループは河に依るものとする。

① 人間ハ老少不定のさたまれるならひとかねて是をは知

食とも禁中みなくれニけり（影³ 3—4）（⁸ 1—1）
³ 2—1

宝グループの本文を示したが、河グループは、傍線部

「といひながら」と簡略である。他系列も河グループと

同じ（ただし、陽明本系列の宮・陽・資・糸・天は「と

云なから未つほめる花の御質たるを無明の嵐にちりはて

給へハ」（陽の本文による。以下同）（影¹⁰ 1—8）と独自）。

他系統では、京図本系統が宝グループに近い。文章としてはいずれの形でも問題はない。

② 手負の兵かすを不知（影⁷ 7—1）（⁸ 3—9）

同じく宝グループの本文を示した。河グループでは、この後に「基盛もあやうかりければ進退きハまれり」の一文が続く。他系列は河グループと同じ（ただし、陽明本系列の宮・陽・資・糸・天は「両陳入乱たる合戦なれハ何勝負あるへしとも見えさりけり」（影² 4—4）と独自）。当該文があれば基盛勢の劣勢が強調されるが、なくても文脈上の不都合はない。いずれの形が本来であるかは定めた⁽⁴⁾。

③ 汝不知哉朝威を軽する者ハ朝敵也朝敵と成る者ハ天の

攻を蒙者也（影³ 3—7）（⁵ 6—7）
⁴ 2—1

河グループは「汝しらすやてうてきとなりぬるものハ天のせめをかうふるものなり是朝威をかるんするゆへ也」と文の順序が異なる。他系列は河グループと同じ。いず

れの形でも支障はないが、他系統では、鎌倉本に宝グループと同じ形が見られる。

- ④ 先祖相伝而三代ニ罷成惟行も三度まで事にあふ（影 4 5 5
— 1）²（7—8）⁹

河グループでは「相伝而」と「三代ニ」との間に「既に推行までハ」の字句が入る。他系列は河グループと同じ（ただし、陽明本系列は「推行までハ此曹三代まで軍にあふ」（宮は異同あり）（影 1 1—5）⁷。いずれの形でも文脈的に問題はない。

- ⑤ 奴ハ一定今度ハ助も置す射落してんすと思はれけれハ
（影 4 7—7）⁹（9—1）⁵

河グループは傍線部を欠く。他系列も同じ。傍線部を持つ形持たない形のいずれが本来かは決しがたい。

- ⑥ 為朝弥怒をなしてあの勢ニかけ入此勢ニかけ合馳廻り
（影 4 9—3）⁸（0—1）⁵

河グループでは「かけ合」と「馳廻り」との間に「きつてハおとし切てハすてをめきさけひて」との詞句が入

る。他系列も同じ。必要不可欠の詞句ではないため、持つ形持たない形のいずれが本来かは決しがたい。

- ⑦ 可然人々も不被候只女坊二三入計そ候けるかきくらす
御涙の内なれは御意の澄としもハなけれども（影 5 5—5）⁶
（2—9）³

河グループには傍線部がない。他系列も同じ。この場合も、傍線部のある形ない形のいずれが本来であるかは判定しがたい。

- ⑧ 我等か身の上ハさてをきぬ只御事の心くるしさにこそ
候へともかくも御身のたすからせたまハん事こそ能候ハ
め只御意ニこそと申ければ（影 5 6—4）⁷（3—8）²

河グループは傍線部を欠く（学は、傍線部を含む周辺「只御事をこそ心くるしく存候へたゞ御意にこそ」（影 2 6 0—1）と異なっている）。他系列を見るに、松井本系列は河グループに近く、陽明本系列・金刀本系列は宝グループに似る。傍線部を欠く形はいささか舌足らずの感がある。

⑨ 中にも和殿ハ入道殿の御跡懐にておほし立られ進せて

御好深き人そかし争やミくとして奉討覽とハしたまふ

そ奉助までてこそなくとも (影 8—7) (4—2)

河グループは実線部を欠く (前はこれに加え破線部も

欠く)。他系列では松井本系列が河グループに、陽明本系

列 (国は一部を欠く)・金刀本系列が宝グループに一致し

ている。傍線部がないと文脈に飛躍が生じるため、これ

を持たない形は欠脱と考えられ、宝グループの形が本来

と思われる。

⑩ (女房は―稿者補足) 声を調ておめき叫ひたまひけり

見る者袖をそしほりける新院も今ハのきわに成たまへは

只あきたる御気色なり女房たちのなきかなしむありさ

まを御覽するにいとゝきえ入心ちそしたまふ (影 3—4)

(7—5)

河グループは傍線部を欠く。他系列も同じ。いずれが

本来であるかは決しがたい。

⑪ 光弘法師とう参れといへなと被仰此光弘法師と申は去

十七日の夜被切たりけるをも不被知食して御言付のあり

けるこそ哀なれ (影 3—2) (7—2)

河グループは傍線部を欠く。院を除く松井本系列は河

グループと同形だが、他は宝グループと同じ。河グルー

プなどの形は「光弘法師」の目移りによる欠脱と判断さ

れるため、宝グループの形が本来と言える。

宝グループと河グループの間に見られる比較的規模の大き

い異同を選び、簡単な検討を加えた。この中、⑨⑪⑧も加

えるか)については、宝グループに本来の姿が伝えられてい

ると思われるが、他の場合は定かでない。ただ、①③に鎌倉

本や京図本系統に宝グループと近い形姿が見られることや、

河グループの先行性を示唆する事例が見いだせないことをあ

わせ考えるなら、宝グループにより本来的な姿が残されてい

る蓋然性が高いとすべきか。

単語レベルに注目した場合、二グループ間の異同は少なく

ないが、いずれの形でも支障のないものが多い。また、二グ

ループのいずれにも誤りが存在するが、数量としては河グル

ープの方にいくぶん多い。

宝・河二グループの関係を確認した上で、個々の伝本の検討に移る。宝グループから見てゆきたい。該グループに属する四伝本では、宝と東、彰と中が各々近い関係にある。まずは、宝・東に近似が見られる事例を示す。

- ① 御辺院へ参られ候はん事何のくるしミか候へき蹤^{蹤力}子息を連れ候ともあひくして参られてこそ交替あるへきに（影 3 9 0 2 2 4 3 1 2）

本文引用は宝に依る。以下同。宝・東以外の伝本では「候へき」と「蹤」との間に「今度はみなおやハ親子ハ子にてこそ候へ」（本文引用は河による。伝本間の小異は無視。以下同）との一文が入る。いずれの形でも問題はないが、鎌倉本・京図本系統にも同趣文が見えている。

- ② 汝か家ニ於てハ不吉の宰史なにゝかハせんとそ申ける（影 5 6 1 2 3 2 9 8）

宝・東以外の伝本では「宰史」「さいしよ」「れい」とする伝本あり」と「なにゝかハせん」との間に「なりと

て御許容なかりしかハ判官陸奥の外ハ給ても」との文が入る。陸奥守を望むが「汝か家ニ於てハ不吉」と許されなかった為義が「陸奥の外ハ」不要として他国を望まなかった旨の記述である。他本の形が本来で、宝・東は欠脱を生じていよう。

- ③ 判官殿君の御敵と成らせたまひて候間頭殿の御承にて政清か太刀取ニて被打させたまひ候ぬ（影 5 6 0 1 2 3 5 4）

宝・東以外の伝本では「太刀取ニて」と「被打させたまひ候ぬ」との間に「昨日のあかつき七条の西の朱雀にて」との句が入る。いずれの形でも行文上の問題はない。

- ④ 手を合せ父ハいつくニわたらせたまふそ只今参そや待せたまやとてこゑくニ念仏たからかになへければ（影 6 1 1 1 3 5 9 7）

宝・東・陽明本系列（資を除く）以外の伝本では「手を合せ」と「父ハ」との間に「ねんふつを申せよとをしへければ三人のおさなひものとも又めをふさきにしにむ

かひ手をあはせ」との文が入る（玄は一部を欠く）。乙若が三人の弟たちに念仏を勧め、弟たちがそれに従う場面であり、他本の形が本来で、宝・東並びに資を除く陽明本系列の形は「手を合せ」「手をあはせ」の目移りにより欠脱を生じたものと推測される（「手を合せ」を、東は「手をあわすれば」、陽明本系列の大半は「てをあはせよといへハ」とする。⁽⁵⁾ また、陽明本系列の国は独自の本文を持つが、この点については二十九頁で述べる）。

宝徳本系列中、宝・東に共通する現象のいくつかを掲げた。これらの事実より、宝・東二本がより近い関係にあることが知られる。

以下、宝・東各本の性格について述べる。まず東については、大曾根章介氏・栃木孝惟氏による先行研究がある。⁽⁶⁾ 栃木氏は、該本が「安定化する以前の四類本（宝徳本系統―稿者注）の原態的態様を宝徳本とともにうつしだすかとみられる」ことを確認した上で、「いくほどの脱文、誤りを抱えた本文である」一方、部分的には、宝の先行形態を伝える部位

を持つことを指摘、「東大本『保元記』の持つ問題性、あるいは、宝徳本、東大本、金刀比羅本の関係をめぐる問題、ひいては四類本の代表本文を決定する課題は、なお多くの問題を残している」とその位置づけの難しさを述べられる。

大曾根氏は、該本が、旧大系本（金を底本とする）と比較して「脱文の多いこと」「独自の異文が少なくない」ことを指摘されるが、その認識は概ね正しい。稿者の計数によれば、東には、二十音節以上（小稿にいう音節は音韻論的音節（モ―ラ）の意である。伝本間で字句に異同のある場合、いずれの伝本に依るか、また漢字の読み方によってもいくほどの誤差が生じる。この場合、各々の箇所で底本とした伝本に依る。従って、得られる数値は一つの目安に過ぎない）の固有欠脱（もしくは省略）が二十三箇所数えられる。これらの多くは大曾根氏の掲出項と一致していることでもあり、紙幅の都合もあって具体的な掲出を控える。ただ、その中、元性服喪に関する記述に、旧「大系本で約百九十字に及ぶ大規模な欠落が見られることには留意しておくべきだろう」。

また、大曾根氏は、旧大系本との比較から、東「独自の異文」「主要なもの」十七箇所を掲げられる。この中の十一箇所については東以外の伝本にも同趣文が見えているので、厳密には左の六箇所が該当する。

- ① 門々を分てかためらる此由をミテ京童部とも申けるハ
をろかなる平城の御かまへかなとあさむき申さぬハなか
りけり（影 5—8）（4—9）
2—7
- ② 嫡たる矢をはつす義朝の運のほとこそつよかりけれ（影
1 2 8
2—1）（9—0）
2—10
- ③ つかハしけり是うんのきわめなりとハ後こそおもひし
られけれ（影 9—7）（3—3）
1—9
3—1
- ④ 諸卿一同に尤然へき由申されければ公家を初まいらせ
てミナ此儀にそ定りける（この間、中下の巻区分あり）
かゝりける処に少納言入道信西（影 0—5）（3—1）
32 6
43 7
- ⑤ 重祚とハ二度位につき給事也（影 7—7）（7—1）
2—7
3—1
- ⑥ 世ハの御歳わかふかきつみにおこなハれ（影 1—6）（0—0）
3—1
4—0

各項、傍線部が東の固有本文だが、こうした類は他にも多く見いだし得る。顕著なものを追加するなら、

- ⑦ 都合五十余騎にハ過さりきゆゝしき上洛とぞ聞えしさ
る程に鳥羽殿にハ（影 7—6）（5—8）
2—7
- ⑧ 月卿雲客一人も候はされはさひしきに（影 9—4）（9—2）
2—9
3—2
—4）（傍線部、他本は「候ハれす」「こうせず」「なく」
など）
- 等が加えられる。
- ①②③⑦は、作者（現今では語り手というのだろうか）も
しくは世人に託しての評言であり、④⑤⑥⑧は説明もしくは
補足である。これらに共通する点は、いずれも行文上必要不
可欠ではないということである。その意味では後補の可能性
が高いかもしれない。単語レベルにおいても東には説明的な
ものが多い。次のような事例が見いだされる。
- ① 彦波涂武鸕草葺不合尊（影 4—6）（4—0）
2—4
2—10
- ② 斎院の御所白河殿（影 5—4）（4—1）
32 6
2—1
- ③ 興福寺の牒使信実（影 6—8）（5—1）
2—6
2—10

④ 多田の満中 (影¹6—4) (1—7)

⑤ 禪定院の僧都信範 (正しくは尋範。また、他本は傍線

部「法印」(影¹6—1) (1—2)

各項において傍線部が東に固有である。②③⑤については

他部に同記述が見えており (②は (影¹4—4)、③は (影¹6—

2)、⑤は (影¹6—1)、それらとの統一を図つたと考えられ

る。これらは、正式名称あるいは説明語の類である。この他、

東には年号に干支を付す場合がある。大曾根氏はこの現象を、

東が「年代記的性格を残」したためと見られるが、そうでは

なく、上掲例と同じく説明の後補と理解すべきだろう。掲出

事例以外にも東には全体に亘つて独自表現が相当数見られ、

かつ小規模な誤りや欠脱も少なくない。こうした事実を総合

するなら、部分的にはともかくも、総体としては、宝徳本系

列中では、欠脱 (もしくは省略) が格段に多い一方、固有本

文も見いだされることよりして、改変性の濃いかなり個性

な伝本と認識すべきかと思う。

次に宝について述べると、該本には二十音節以上の固有欠

脱 (もしくは省略) は見いだされない。もっとも、前掲の如

く東と共通する比較的規模の大きい欠脱があり、かつ微細な

誤写・誤字の類は少なくない。しかし、固有の長脱部位がな

く、固有本文もごく僅かであることを考えれば、限界はある

にせよ、他本に比した場合、全体的により純良な姿を伝える

度合いが高いかと思われる。

次に、中・彰について述べる。当該二本に「多くの共通点

がある」ことは、既に大島龍彦氏の指摘されるところである。

彰は宝徳本系統本文に為朝説話を追補した、永積分類に言う

京師本系統の伝本だが、宝徳本系統本文部については、中と

の間に符合・一致が多数見いだされ、その緊密度は、宝・東

間に見られるそれよりも遙かに高い。些細ではあるが、両者

間における符合・近似の事例をいくほどか掲げる。本文引用

は彰による。なお、他本については宝の本文をもって示すが、

異同が大きい場合はそのいくつかを併記する。

① 寒暑境をあやまたす (影¹9—1) (1—8)

「寒暑」を、中は「かんうむ」と平仮名表記するが、

これは彰の誤った振り仮名と一致する。

- ② 左馬寮さまのすけの使つかい（影 3 9 — 7）（1 — 2）

「左馬寮」を、中は「左馬助」とし、振り仮名の方と一致する。

- ③ 御うらみつくして（影 4 0 — 5）（2 1 — 1 0）

傍線部は、他本の如く「深く（ふかく）」とあるべきところ。中・彰共に同じ誤りを生じている。

- ④ ふけゆくまゝにあつまれハ（影 4 0 — 1）（2 1 — 2）

傍線部、他本は「しつまれは」「しつかなれは」などと妥当。中・彰の記す「あつまれハ」は誤り。

- ⑤ かふとまいらせよとてさふらひをめて馬のあし立
なをし（影 4 3 — 1）（2 3 — 6）

傍線部、他本は「緒をしめ」とする。中・彰の形は「緒」を「侍」と誤読したことから生じたか。

- ⑥ ていたこのミきやつ（「このミ」ミセケチ）の言はかな（影 5 1 — 8）（2 8 — 4）

傍線部は、彰がミセケチ訂正する如く「ていたきやつ」

とあるべき。中は「ていたこのミ」とし、彰の本行本文の誤りと一致する。

- ⑦ たすけすて給へミセケチ（影 5 2 — 9）（2 9 — 1 7）

「助はて給へ」（東）（影 1 3 — 3）の「は」を「す」と誤ったものだろう。彰は「すて」をミセケチとし衍字とみ
なすが、中は「たすけすて給へ」と誤った形を残す。

- ⑧ こうやくよりこのかた（影 6 0 — 7）（3 3 — 2）

傍線部、「劫初」が正しいが、中・彰共に同じ誤りを生じている。

- ⑨ わがごせをもねかハはやと千なミおもひけれ共（影 1 0 — 8）（3 5 — 6）

傍線部、中も「ちなミ」とするが、他本の如く「千度」「ちたひ」とあるべきところ。中・彰共に同じ誤りを生じている。

- ⑩ とううけ申て（影 6 5 — 1）（3 7 — 1 4）

傍線部、他本は「辞」「いなミ」もしくは相当部を持たない。中は「請」とする。彰の「うけ」は「請（こひ）」

を「うけ」と誤記したものでろう。

このように、中・彰両本間には偶然の一致とは思われない共通の誤りが少なからず見いだされ、さらに、両本にのみ共通する欠脱（もしくは省略）もいくつか存在する。顕著なものは次の如きである。

① 是等を始として一人当千の兵十七騎都合五十余騎にハ過さりけり（影⁸1—5）（⁸5—6）

② 汝ハ内裏へ参れ我ハ院へ参覧主上軍ニ勝給は汝をたのミて我ハ参らん院軍ニ勝せ給ハ、我をたのミて汝ハ参れ（影⁶7—3）（⁰9—5）

③ 左衛門大夫家弘子息左衛門尉盛弘右衛門尉^{ミセケチ}衛門光弘文章生安弘（影⁵7—9）（³3—9）

本文引用は宝に依る。①②③の各々において、中・彰ともに傍線部を欠く。③は不注意に因る欠脱と思われるが、①②の場合は省筆も考えられる。

以上より、中・彰両本は極めて親しい関係にあることが知られる。ただ、いずれか一方が他本に比して絶対的に優位な

位置にあるという事実は認められず、両者を親子関係もしくはそれに準じる直接的な書承関係で捉えることはできない。中は彰（京師本系統）の親本となったであろう宝徳本系統の一本とさほど溯らない時点で共通の祖本にたどり着く関係にあると推測される。

当該二本の本文面での優劣については明確な判定が困難だが、二十音節以上の欠脱（もしくは省略）数を計数すると、彰が三箇所、中が一箇所となる。彰については次の如くである。

① 将門純友ニも貞任宗任にも勝たり上代にもためしなく（影⁷0—1）（²5—5）

② 院の御事をハたれかハ見とゞけ進せへきとおもひけれハよろほひくつかまつる院も合戦のまきれなれハ御供もまいらすして（影⁵3—2）（³1—1）

③ 我も参覧人も参覧と申しかは様々ニすかしおかせたまひてけさ我等かねたりつる間ニ（影⁶1—9）（³6—3）

本文引用は宝による。上掲の各項について彰には傍線部が

ない。①②は不注意に因る欠脱だろうが、③は省筆かもしれない（②については、傍線部相当記述が恐らくは別筆で行間に記されている。原本未確認）。

一方、中の場合は

加之推古天皇の御宇上宮太子世二出て守屋か邪見を平て

(影¹2—6) (6—1)

の傍線部を欠くのみである（本文引用は宝による）。

この限りでいえば、中の方がより純良な本文を備えるかに見える。しかし、二十音節以上という条件を外した場合、十九音節の欠脱が一箇所見られることを始めとして、欠脱（もしくは省略）数はむしろ中の方に多い。誤字も中の方が多い。固有字句は両者共に少数かつ細微であり、しかも、それらは筆の勢いに伴って生じた類のようで、自覚的な改変意図は見いだされない。共に親本に忠実たろうとする姿勢が濃い伝本と認められる。その忠実度は、いずれかといえば彰の方がいくぶん高いか。

以上、宝グループに属する四伝本の概略を確認した。次に

河グループ四本の検討に移る。河・学・支・前四伝本の中では、河・学がより近い関係にある。両本に見られる比較的規模の大きい符合例をいくつか示す。本文引用は河に依る。

① 権現託してあからせ給ひぬ (2—6)¹

傍線部、他本は「やかて」（影³4—5）（宝に依る。以下同）とする。ただし、東は傍線部を持たず、金刀本系

列は河・学に同じ。

② かたなをぬかせすしけれハ (3—4)^{2 7}

傍線部、他本は「腹をもきらせすりけれハ」（影³7—8）

（伝本間の小異は無視。以下同）とする。ただし、金刀本系列の文・理は河・学に同じ。

③ 真にゆゝしく候 (5—1)^{2 3}

傍線部、他本は「ゆゝしき兵にて候けり」（影⁴0—8）

とする。ただし、金刀本系列は河・学に同じ。

④ くらかねをのへたるたてなりとも (6—2)^{2 5}

他本は「鉄を延て楯二つくとも」（影⁴3—9）とする。

ただし、金刀本系列は河・学に同じ。

⑤ 今すこしあかりたらしかはあぶなかりし事ぞかし(8 3
— 9)

他本では「ましかは」と「あぶなかりし」との間に「頸
の骨なにかはあらまし」(影 6 3 4 6 — 5) との句が入る。

⑥ 如來すこふるゑミをふくミてのち入涅槃の事すてにち
かし(1 2)
3 9

他本では「ふくミて」と「のち」との間に「曰吾ハよ
な八十年の化縁つきて」(影 4 1 5 4 — 8) の文が入る。行文上
必要な句であり、河・学に共通する欠脱である(東も「如
來頗ゑミを含て覽事すてにちかし」(影 7 1 6 7 — 8) とほぼ同
様な箇所に欠脱を持つが、河・学とは無関係だろう)。

⑦ 御書を公家へそたてまつらせ給ける朝家の御ため野心
をさしハさま(マ)せ(8 4 3 — 1)

他本では「給ける」と「朝家」との間に「其御書ニハ
起請の詞を被載たりけるとかや」(影 5 6 6 5 — 4) の一文が入
る(金刀本系列の博・習も河・学に近い形を持つが、傍
線部が「給ひけるとかや」とある)。

これらは、河・学の近似を示唆する現象と見てよいだろう。
両者の間には親子関係もしくはそれに準じる直線的な書承関
係は考えられないので、現存本をいくほども溯らない時点で
共通祖本にたどり着く関係にあると思われる。
さて、学の場合、二十音節以上の固有欠脱(もしくは省略)
は次の二項である。

① 褐の直垂ニ師子丸を三縫たるに黒き唐綾を太くたゝ
ミて威たる大荒目の鎧の師子丸の裙金物(影 0 5 4 0 — 7) (5 2 2)

② 為朝戦しかつてひかへたれ共近付者もなき上馬疲ニけ
れハ(影 9 8 4 9 — 6) (0 0 3 0 — 1 7)

本文引用は宝に依る。学は①の傍線部を欠き、②の傍線部
を「そのうへ」とする。①は「師子丸」の目移りに起因する
欠脱と推測されるが、②は省筆が考えられる。

なお、系列内でのみ固有との条件を付けるなら、次の事項
も加わる。

此功力をもつて欲赦彼科莫太行業を併三惡道ニ投籠其力

を以て日本国之大魔縁となり（影⁸ 6—2）（0—1）
 についても学は傍線部を欠く。ただし、陽明本系列の広・佐
 も同部を欠く。「力をもつて」「力を以て」の目移りに起因す
 る欠脱と考えられるので、学と広・佐の符合は偶然ではない
 か。

この他、学には十音節以上二十音節未満の固有欠脱（もし
 くは省略）が数箇所見いだされるものの、全体を通して欠脱
 数は少なく、その点では相対的に純良な本文を保つと言えよ
 う。他には、些細な固有字句が比較的目につく。以下にいく
 つかを例示する。上に学、下の（ ）内に他本の本文を示す。

他本の本文は宝に依り小異は無視するが、異同が大きい場合
 はいくつかを併記する。

- ① 大功難有候（「鍊せざる者にて候」（伝本間の小異は無
 視）。ただし、陽明本系列には学とほぼ同字句が見られる
 （天は「大功」を「たいせつ」とする）（影⁸ 8—9）（5 0
 2 5 0
 1 3
 1）
- ② 為朝召に応して参候す（相当文なし。ただし、陽明本

系列の宮・陽・資・糸・天は学と同じ）（影⁸ 8—3）（5 0
 2 5 0
 1 6
 1）

- ③ 弘法大師（弘法高祖）（影¹⁰ 1—1）（6 0
 2 6—8）

- ④ 矢風はかりをおハせて（矢風計をひかせ奉て）（影¹⁷ 3
 1 7—3
 2 9 0
 9—1 3
 1）

- ⑤ さんく射ける（傍線部なし。ただし、陽明本系列
 は異文）（影¹⁹ 7—1）（0—3）

- ⑥ かうをこひても助るへき（「降を乞はんになとか助進
 せざるへき」。ただし、陽明本系列は異文）（影²¹ 2—8）（0 8
 3 0 8
 1 2
 1）

- ⑦ 或ハ（「党者共をは」。「党」を「賞（しやう）」「堂」
 と誤るものもある）（影⁵ 7—7）（3—8）

- ⑧ 涙にむせひ（涙をなかし。ただし、陽明本系列は相当
 部なし）（影¹¹ 1—6）（5—2）

- ⑨ 胸うちふさかりて（むね打騒て）（影³² 3—1）（3 4
 3 6—1）

- ⑩ はしり川へそ入にける（傍線部「つゝきて」「これも」
 もしくは相当部なし）（影³³ 3—3）（6 8
 3 3—1 2
 1）

といった事例が掲げられる。

②⑤は補足、その他は言い換えである。①②は、宝徳本系列中では学が独自だが、陽明本系列の全本もしくは一部の伝本と合致していることより、該系列との関わりが考えられる。

要するに、学は、欠脱・省略は比較的少ないが、小さな本文改変が全体を通して見られる伝本と捉えられよう。

次いで河の場合、二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）は二箇所見いだされる。

- ① 国司官人等か計として志度の道場の辺鼓の岡といふ所
ニ御所しつらふて（影⁷ 6）（⁵ 9 1 7）

- ② 世澆季ニ及と云へとも万乗の余薫ハなをのこらせたま
ひけるにや（影⁶ 9 7）（⁴ 0 1 4）

本文引用は宝に依る。河は①②ともに傍線部を欠く。②は単純な欠脱と思われるが、①は省筆であるかもしれない。

加えて、

その人なくても難治の次第なるへけれハ力及さる事と

そみえたり信西宣旨を奉て下野守を召されけり（影⁷ 2 1 2）

2
2
（6 9）

についても、河は傍線部を「なり」とし、簡略である。ただ、金刀本系列の金・博・理も同形を取っている。また、

今を限とおもひければ子共立帰て父を喚返す子共思切て
行けれハ父又子ともをよひ返す（影⁰ 7 5）（⁴ 3 1 2）

についても河は傍線部を欠くが、松井本系列の実や院と欠脱が一部重なる。ただし、実と院は欠く部位を異にする。

他には、全体を通して小さな誤りがいくほどか見いだされる⁽⁸⁾。また、固有本文も微細なものが僅かに見いだされるにすぎず、積極的な改変意図が働いた様子はない。これらのことより、河は、学に比す時、親本（祖本）の本文をより忠実に伝える位置にあるかと推定される。

次いで、支について述べる。該本については笠柴治氏の解題がある⁽⁹⁾。それに依れば、C系列（宝徳本系列・陽明本系列を一括した前称）に属するとの由である。稿者の追調査によっても、支は宝徳本系列中、河・学・前と一つのグループをなすことが確認されるので、氏の判定には概ね賛意を表した

い。ただし、支が学に「最も近接した本文を有する」との判断については、笠氏が対校された伝本の範囲内において妥当との条件が付される。

支における二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）は四箇所ある。

① 文詩を献し。^和哥を奏す奏するところの詩哥いづれも

く祝言ニあらさる事なしされともその中二下されける

一首の御製（影^{3 3}—⁶9）（⁵1—⁵5）
³2

② 御願書を座主の宮ニ奉せたまひけれハ則神殿に奉籠心

府肝膽を摧て（影⁵2—⁸9）（²1—⁵5）
³1

③ 御留守ニ留て仏を恋たてまつり毘首羯摩天ニ誂赤梅檀

をもつて（影⁵4—¹1）（⁸1—³0）
³1

④ 心つよくも見さりしか左府はいかはかりかほうらめし

と思つらむかゝるへしと思ハ世に恐人ニはゝかりても（影⁹4—²1）（⁰2—¹0）
³1

本文引用は宝に依る。支は各々について傍線部を欠く。③は単純な欠脱であろうが、①②④については省筆も考えられ

る。

系列内でのみ固有との条件下では、次の事項が加わる。

平氏の郎等源氏を不討源氏の郎等平家を不討は合戦候へ

しや平氏の郎徒の射矢源氏の御身ニ立やたゝすや（影⁴2—⁶2）
²1

2）（⁸8—⁵1）

についても、支は傍線部を欠く。ただし、宮を除く陽明本系列も相当部を欠いている。また、松井本系列の実・九とも欠く部位が一部重なる。

この他に、全体を通して小さな誤りが散見する。固有本文については、ごく微細なものが僅かに見いだされるにすぎず、積極的な改変の痕は見えない。規模の大きい欠脱（もしくは省略）がやや多いが、この伝本もまた、親本の本文を比較忠実に伝える位置にあると判断される。

最後に前であるが、二十音節以上の欠脱（もしくは省略）は五箇所見いだされる。^(1,2)

① 御気色を伺奏聞せらるへしと宣ければ急帰参て此由を

奏しければ新院仰やりたる方もなくて（影³8—⁶3）（⁴4—¹1）

6)

② あきまかそへの悪七別当討手の城八手取の。与次三郎

高間三郎 (影 1—2) (5—4)

③ 押圍て索り求ニ寺中広博ニしてたつね出しかたかりけ

れハ内裏へ使者を進て (影 2—1) (1—4)

④ 我朝円融院の御宇天元年中ニ東大寺春然上人 (影 4—

9) (1—0)

⑤ 御形見とて被御覽つる御孫の公達ハ皆散々に成たまふ

(影 5—6) (8—8)

本文引用は宝に依る。前は各々において傍線部を欠く (④

については「春然」が「ねん禅」。

③④については省略とも

考えられるが、他は不注意に因る欠脱とみて差し支えなかる

う。

これに加えて、

かいな被抜たれはとて為朝ちとも損あるまし弓こそすこ

しよハくなるとも (影 7—1) (9—1)

も損あるまし」を欠く。

小さな誤写・誤記も比較的目立つ。それらの多くは不注意

による単純な誤写だが、意味を解さないままに書写したと思

われる部位が相当数見いだされることより、書写者の判読力

・識見の程度が窺われる。固有本文には特筆するほどのもの

は見いだされない。

この他、小さな字句を欠く場合がいくほどか見られるが、

そこには省筆意図が働いているようだ。例えば、「大勢の中へ

かけいりてうちへ (「うちへ」ミセケチ) くもて十もんしに一

もミもうて」と記す箇所、相当部を他本に求めると、「大勢の

中へかけ入て内へかけ外へかけ蜘蛛十文字に一もミもふて」

(河に依る) (0—5)

とあり、前には存在しない傍線部があ

る。この事実から前の運筆を推し量るなら、「うちへ」まで書

写した時点で傍線部の省筆に思い及び、「うちへ」をミセケチ

として処理したとの推測が可能ではないか。この捉え方が許

されるなら、前が小字句を欠く理由の一半を該本の省筆意図

に帰すことができるかもしれない。

前の性格を要約するなら、欠脱（もしくは省略）を比較的多く有し、また、不注意もしくは知識不足による誤写・誤記の類が比較的目立ち、かつ、行文に支障のない程度に小字句を省略している伝本と捉えられよう。

なお、該本については、尊雅筆とする古筆家による極めが上巻表紙に貼付されている。確かに筆跡は尊雅のそれに似る。ただ、尊雅筆と考えた場合、書写者の識見の低さに由来する誤記が散見する事実となじまないように思われる。もっとも、親本もしくは祖本の段階で既にそうした誤りを生じており、該本がそれを忠実に書写したと考えるなら、上記の不審も一応解消されるかとも思うが、筆写者の同定については慎重な検討が求められよう。

以上、宝徳本系列に属する八伝本（十一伝本）の親疎関係並びに各本の大まかな性格を通観した。

結果として、以下のことが確認できた。

一 宝徳本系列の諸本は、その本文の親疎関係より、さらに宝グループと河グループに分けることができる。

二 両グループでは、宝グループに本来の形が留められている度合いが高いか。

三 宝グループ中では、宝と東、中と彰に各々近似が認められる。東は個性の強い本文をもち、宝は総体として祖本への忠実性が高いか。また彰・中については彰の方がやや優れているか。

四 河グループでは、河・学に緊密な関係が認められるが、親本への忠実度という点では河が優れているか。前は欠脱（もしくは省略）が比較的多くまた誤字も目立つ伝本である。支は、忠実度の点で河・学と前の中間に位置する。

五 卓越して優れた本文を持つ伝本は存在しないが、しいていえば、宝次いで彰が、系列のより本来的な姿を比較的確実に伝えているかと思われる。宝自体は固有欠脱（もしくは省略）が少ないが、東との共通祖本の段階で生じた比較的大きな欠脱を引き継いでいる。また、彰の場合も、その親本となった伝本（現存本をさほど溯らない段

階で中と祖本を同じくする）は、微細ながら比較的多くの改変字句を持つ伝本であつたらしく、それを彰は継承しているようだ。

以上のことより、宝徳本系列諸本中では、相対の域を出るものではないが、宝がより信頼できる本文を持つ度合いが濃いと考えられ、それは結果として大井氏の結論を支持することになる。ここに得られた結果は、本文の類似の多寡を目安とした概括的な把握を出るものではない。当然ながら、伝本相互における全ての現象が右の結論を支持しているわけではない。

[注]

- (1) 「宝徳本系統『保元物語』本文考―四系列細分と為朝説話追加の問題―」（『和歌と中世文学』 昭和五十二年）

- (2) 「管見『保元物語』の伝本二、三」（『徳島大学総合科学部創立記念論文集』昭和五十九年）、『保元物語』

写本目録稿」、「『保元物語』写本目録稿補遺」（徳島大学総合科学部「言語文化研究」第六巻、第十五巻 平成十一年二月、平成十九年二月）、「奈良絵本保元・平治物語について」（『汲古』第四十五号 平成十六年六月）

- (3) 注(1)の論文。

- (4) 該部については、栃木孝惟氏に詳察がある。東京大学国語研究室資料叢書『保元記 平治物語』解題（汲古書院 昭和六十一年）

- (5) 東は「手を合せ」を「手をあわすれは」と改めることで行文の是正を図っているが、処置として不十分である。その点、大は「てをあはせよといへハ」と改めることで、文脈の飛躍を埋めることに成功している。

- (6) 複製日本古典文学館『保元物語 東京大学本』大曾根氏解題（ほるぷ出版 昭和五十三年）、東京大学国語研究室資料叢書『保元記 平治物語』栃木氏解題（汲古書院 昭和六十一年）

(7) 『中京大学図書館蔵国書善本解題』（平成七年）

(8) 河の誤りの事例としては次の如きが見られる。() 内が適正と思われる記載である。

- ① 下^{げしやく}威^い（外威）（2—5）、② かんきを^{かんき}かそ^{かそ}ふる（傍線部「蒙」）（2—1）、③ 配^{はい}任^{にん}（拜任）（4—2）、④ つくかし（筑紫）（8—2）、⑤ 感^{まじ}しあへり（感しあへり）（8—1）、⑥ したしミ（まのあたり）（9—1）、⑦ しげひら（重病）（8—4）、⑧ 秀^{ひでさと}里^り（季実）（8—1）、⑨ うんかく（雲霞）（8—1）

⑥の「したしミ」は親本（祖本）に「親」とあるのを読み誤ったものと思われる。また、①③などは、親本（祖本）が平仮名表記だったかと推測させる現象である。

(9) 河の固有本文としては次のごときがある。() 内は他本の本文である。

① まことに別^へして（「真先かけて」「まつさきして」など。陽明本系列は異なる）（7—9）、② よせて（「御

方」「味方」など）（2—1）、③ のゝしりく（「這々」

「つぶやくく」「遙に」「方々へ」など）（9—5）、

④ 相^{あい}見^みてまし（「をしミてまし」「みはてまし」「おし

まで」など）（6—1）、⑤ このをくりによって（「此道

ニ依て」「此道にこそ」など）（8—4）等であるが、

①③⑤は恐らくは親本の誤読・誤解から生じたものだろう。

(10) 在九州国文資料影印叢書『保元物語』解題（昭和五十四年）

(11) 支に固有の本文をいくつか示す。() 内は他本の本文である。

① かなたをぬか^せすはらをもきらせすかさなれハ（「刀をもぬかせす腹をもきらせさりけれハ」「刀をぬかせすければ」「刀をもぬかせねハ腹をも切えず」など）（影 3—1）（3—4）、② 馬の上事からかふとのきやう（「馬居事柄群二ぬけて」「馬居事から諸軍勢にぬけて」など）（影 1—1）（8—9）（8—1）、③ かなしきかなや

(「怨哉」「あたるかなや」など)(影 5 5
1 4
1)、④いたはしくや(怖くや)(影 2 2
1 8 1 5 1 5 3 2 3
3 4 7)、
⑤またけかうもなきやらんためてけかうし給ぬら
ん(傍線部なし)(影 2 4
0 1 2 3 6 0 5
3 6 1 5)、⑥かはらの
いしハよみつくすとも(傍線部「つくる」。「崩」と誤
るものもある。松井本系列は相当部なし)(影 2 2
1 1 1 2 1 1)
3 6 6
1 1
などが挙げられる。

(1 2)
前には、行間に校合・是正・書き入れ等が見られ、
二十音節以上の書き入れは三箇所存在する。判断が難
しいが、もし、これらが後人による補入であるなら、
当該部位も欠脱(もしくは省略)に加えられる。それ
らは次の如くである。

- ① おそれをの_○きける程にか_○る御なけきの中にも_○
○新院の御心のうちしりかたしされハにや禁中も物
さハかしく(2 2 5
2 3 3)
② せていしやくねんに_○よつてこのときにしけひと
○してほうしぬこれ天のうけさるところあきらけし
の親王(2 2 8
2 2 8)

③ 判官としなりにおほせて_○たいの御中(2 3 9
2 3 2)
○めしとはれけれハ関白殿と左大臣殿と御きやう
(1 3) 書写者の識見不足を思わせる事例を示す。() 内
は宝などが記す適正と思われる本文。

①(へせひのせむてい(平城の先帝)(6 1
2 4)、②きん
なか(禁中)(6 2
2 4)、③無道(武道)(6 5
2 8)、
④わうせん(黄鉞)(6 7
2 1 2)、⑤へすかせんしま(倅
囚か千嶋)(2 3
3 2 8)、⑥ことくく大事(後徳大寺)
3 4
3 2 8)、⑦まさとう(正統。但し宝は「正縁」と
誤る)(3 6
3 1 1)、⑧こつせう(劫初)(3 9
3 2 2)、⑨血
をあやしミ(血をあやし)(3 7
3 9 1 6)
(1 4) 目立つ固有本文としては、例えば「清盛まことにこ
とハくわしくなりとお_もそ_も「そ」ミセケチ」れけれハ」
(5 1
3 1 2)の傍線部があげられるが、恐らくは「清盛
誠三理也と被思けれハ」(宝による)(影 5 6
9 9)を仮
名表記した伝本を誤読することより生じたと思われ
る。また、「淀川しりにみちく_くに人を置けれハ」(8 6
3 8 6
9)も、「淀河尻にみちく_くけれハ」(河による)の

如き形を誤ったか。

二、陽明本系列の諸本

陽明本系列に属すると判断される伝本は、零本・零葉を含め、糸・国・佐・大・天・仁・零・広・陽・正・宮・資の十二本である。

該系列に特徴的な共通異文として犬井氏は左の四箇所を掲出される。^① 本文引用は便宜的に陽に依る。

- ① 左大臣殿為朝をめされて仰けるハ歎すてに指よせたり
八郎罷出て防へしとて則蔵人の官を行はれければ（影¹⁰⁸
— 8）（7—4）⁵

- ② 此詞を不用して罷出なハ兄の恨死後迄も残へしと思けれハけにも御理也他人ハ誰か扶申へきさらハよ所へつれ
参候へきとて又昇負て出にける京白河 原^{（ミセケツ）} も合戦の
最中に置たてまつるへき所もなければ山科の辺にとある
在家へつれ行て預りをきて則走帰て其夜の軍に合けるを
ほめぬ人こそなかりけれ（影⁴—3）¹（9—1）⁵

- ③ 守護させ申へし角申為朝ハ入道殿に着そひ申東八ヶ国

の家人を催守護し申さんに西国の勢何十万騎寄来共何程の事か候へき然ハ鎌倉に都を立入道殿をハ法親王と仰奉り八ヶ国の家人等中に然へき（影³—6）²（3—4）¹

- ④ 汝か父為義を我したくに隠をく由聞召急討てまいらせよと仰下されければ義朝畏て尤勅定の趣通かたく候間誅伐仕へく候へ共正しき父子の儀ためしすくなき事にて候へハ（影⁵—4）²（3—5）³

①④の各々について、他系列がいかなる形であるかは犬井氏の論文に依られたい（②については、資は傍線部が他の陽明本系列と大異し、他系列と一致している。この事実については資の性格を考察する際に検討する）。陽明本系列の共通異文はこれ以外にも多数見いだされるが、上掲四例をもってその共通性は示されていると思われるので、新たな事例を加える必要はない。ただ、これらは三巻本でいえばすべて中巻に属しているため、中巻を欠く、また中巻（もしくは相当部）が異系統本文である天・仁・零については、判定の目安を得

られない。その不備を補うために、全本が対校可能な部位に存在する陽明本系列の共通異文を付け加えたい。

- ⑤ 人間ハ是生死無常の習電光朝露の境なれハ(影⁰2—9)
(2—6)³

傍線部を、他本は「芭蕉泡沫」(宝の本文に依る)(影⁰35—6)とする。

- ⑥ 誠忠節たるへく候に(影³5—5)(4—3)³
1

相当部を、他本は「交替あるへきに」(宝の本文に依る。

〈影⁰9—4〉「交替」を「けうさん」「うけこたひ」とする
3 3
る伝本もある)とする。

①〜④に比して規模はきわめて小さいが、この二例を陽明本系列の共通本文に加えたい。

上掲項目①〜④が中巻に位置することからも推測されるように、陽明本系列に特徴的な異文は、三巻本でいえば、上巻後半から中巻に集中している。規模・数量ともに中巻に最も顕著であり、次に下巻が続き、上巻が最も少ない。その濃度には偏向がある。

該系列に属する十二伝本は、その内部でさらに宮・陽・資・糸・天と国・広・佐・大・仁・零の二グループに分かれたる^②(正は未見のため利用できないが、宮と正が「微細な点にいたるまで、完全な同類同種本である」ことが永積安明氏により指摘されている)^③。小稿では前者を陽グループ、後者を広グループと仮称したい。まずは、陽グループにおける共通現象の中から顕著な事例を示す。本文引用は陽に依る。

- ① 老少不定と云ながら未つほめる花の御質たるを無明の嵐にちりはて給へハ禁中皆暮行て天下悉忙然たり(影⁰17)(1—1)⁶
2 2

四頁に既述したように、傍線部は陽グループの固有記述である。

- ② 非生の草木に至迄恋慕愁歎の色を顕しにことならずまして近召仕れし公卿殿上人馴ましく思召月卿雲客いかかりの悲涙にか沈たまふらん(影¹2—5)(2—1)³
2 2

相当部、広グループ(零は長脱)並びに他系列は「非情草木山野猷江河の鱗ニいたるまで物をおもへるすかた

也婆羅林ニ風やんてその色忽ニすゝしく跋提河の水咽て又そのなかれも濁れり万木千草皆以悲涙の相をしめしき彼二月の中の五日の御入滅ニハ五十二類かなしミの色をあらハし此ふ月の始の二日の崩御ニハ九重上下心なきたくひまでも猶愁の色をや含む覽ましてちかくめし仕なれくしくおほしめされし人々いかばかりの事をおもハれけん」(宝の本文に依る) (影⁵1¹2) とする。陽グループには大幅な省筆があるか(資は「山野のけた物かうかのうろくつ」を、「草木」と「に」との間に行間補入する)。

③ 又此のちもいかなる事かあらんすらんと皆人つゝしミあへりさるほとにかゝる御なけきの中なれとも新院御位を奪させ給ひてをしこめられさせ給ひたる御有様にて渡らせ給へハ御心中にもいかなる事かを思召企させ給はんすらんと禁中も物さハかしく (影³2¹6) (2⁵2²)

傍線部、広グループ並びに他系列は「まことに深淵ニ臨て薄氷を踏かことし恐惶きける程ニ御なけきの中にも

新院の御心の中しりかたしされはにや」(宝の本文に依る) (影⁵3⁴514) とする(ただし、宝徳本系列の前は「新院の御心」以下が行間補入)。

④ 手負者数をしらす両陣入乱たる合戦なれハ何勝負あるへしも見えさりけり (影²4²3) (3⁶19)

四頁に既述したように傍線部は陽グループにのみ存在する。

⑤ 教長此条惣して心得候ハす世間に定相のなき物ハ夢幻に譬たり (影⁴5⁴10) (4⁴2⁴11)

傍線部は陽グループにのみ存在する(天は「世間に」を欠く)。

陽グループにのみ共通する現象のいくつかを示した。これら全てが三巻本でいえば、上巻に存在していることより、陽グループは上巻に重点的な改変を加えた伝本群であると思われる。

一方、広グループに属する諸本の場合、共通欠脱(もしくは省略)は見いだされる⁽⁴⁾が、顕著な共通異文は存在しない。

このことより、陽グループに比して広グループには積極的な本文改変の意図は見られないといえそうだ。

陽・広各グループの性格を確認した上で、個々の伝本について検討を加えたい。

広グループより見てゆく。まずは、国の場合、二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）が十箇所存在する。以下にその部位を掲げる。

- ① 国母女院も御姿を見進させ給ふへからす中にも女院の御歎類少かりし御事也（影 2 1 9）（2 1 4）（傍点部、国「によくはん」）
- ② 上を下に返してさはきあへり哀為朝ハ能申けるものとて万人申あへり（影 0 7）（7 1 1）
- ③ 景政か四代の末葉大庭の庄司景房か子相模の国住人大庭の平太景能（影 3 9 5）（9 2 7）
- ④ 馬の折骨五六枚さつと切て矢ハ後へとをりて大地にたち竊ハわれて此方へさつとちる（影 4 1 5）（9 1 3 9）（松井本系列の昭は、傍線部「いきつてやハあなたへつとい

とをしかぶらハ大ぢにさつと」と固有）

- ⑤ 四郎左衛門頼賢掃部助頼仲三十騎計を相くして義朝か大勢の中へ切て入（影 5 1 0）（0 3 3）
 - ⑥ 様々申されけれハ諸卿一同に尤然へきよし申されけるを信西御後見として（影 1 1 3）（3 6 3 1 7）
 - ⑦ 輿の中よりこほれ落させ給ひて形見の髪を胸にあてもたへこかれ悲ミ給ひていかに義通（影 6 1 7）（6 5 3 6 4 5）
 - ⑧ 夢ならハ覚ての後ハいかならんうたてしの世中や情なの下野殿や願ハくハ我をも（影 6 1 0）（6 1 7）
 - ⑨ 重貞に告たりけれハあはれ是ハ鎮西八郎よとおもひて見しりたる雑色の有けるを遣し（影 9 1 2）（8 1 1）
 - ⑩ 重科に行へしと云共其庭をのかれ来たり今まで有上ハ自然の天運と可謂今更死罪に及かたきか（影 9 1 3）（8 3 9 3 1 3）
- 本文引用は陽に依る。各項について、国には傍線部が存在しない（⑧は陽明本系列の共通異文）。この中、④⑩については、傍線部がなければ文脈に飛躍が生じるので、これらは国

における不注意に因る欠脱と判断される。その他についても、目移りによる欠脱が推測される場合が多いが、②⑧など意図的省略かと思われるものもある。

顕著な固有欠脱（もしくは省略）を掲げたが、もう少し柔軟に見るなら、さらに左の五例が加えられるか。

- ⑪ 敵ハ僅の小勢御方ハ大勢也頸をとりては詮もなし生捕こそ大切なれ（影²4—8）（²3—1²）（傍点部、国「こせい也」）

- ⑫ わたらせ給ひける急告申たりけれハ大騒給ひて御所へ入進せん事叶へからず（影²8—2）（¹1—1¹）（傍点部、国「たまへは」）

- ⑬ 涙關干として神飛揚す前途程遠後会其期を失へり（影²0—4）（³3—1⁰）（傍点部、国「をくたく」）

- ⑭ 和殿ハ入道殿の御跡ふところにてそたてられ進せて御いとをしミふかき人そかしいかてかやミく〜とハ討奉らんとし給ふそや（影²2—8）（¹4—2²）

- ⑮ 父ハ討れ給ひぬ頼たてまつるへき兄達ハ皆きられ給ひ

ぬ助へき下野殿ハ角情なくおハします（影²4—6）（³5—6—

4）

⑪については松井本系列の院が、⑫については金刀本系列の習が、各々国と同じ部位を欠いている。⑬については、欠く部分が広・佐と一部重なる。また、金刀本系列諸本は傍線部を含むより広範囲を欠く。⑭については宝徳本系列の河グループと松井本系列が「御いとをしミ・・・やミく〜とハ」（前は、さらに「し給ふそや」まで）を、⑮については、広・佐も「兄達ハ・・・助へき」を欠く。⑪⑫の場合、国とそれらとの間に何らかの関係があるのか偶然の一致であるのかは分からない。⑬⑭⑮については、欠く部位が一致していないので、国とそれらとの間に関連性はないと思われる。

以上、規模はさほど大きくないが、全体を通して欠脱（もしくは省略）が比較的多く見られることが確認される。文脈を辿る上で影響のない程度の小語句が国のみに存在しない現象が全体を通して見いだされることもまた、該本の省略性を示しているようか。加えて、微細な字句の誤りも多い。

一方、僅かながら、固有の小詞句や表現が見いだされもする。そうした中から目に付くものを示す。

① 御心にまかせぬ御事なれはいわんやまつたいにをぬて
をやこんゑのあんはにんわう七十六たいにあたり給へる
御かとよまつせにおよひ (1—3)
2 7 1

他本は実線部を持たず、替わりに「我太子」(陽の本文に依る)(影 1—8)との語が入る。いずれの形でも支障はないが、国の場合、同趣の記述(破線部)が後続しており重複感がある。

② はんくはんたいめんしてためよいやくもゆミやの
いゑにむまれ (4—6)
2 2

広グループの他本には傍線部がない。その他は傍線部を「出向て色代して申けるハ為義」(陽の本文に依る)(影 5—1)とする。推測するに、当該部、他本の如きが本来の形だったが、広グループの早い段階で不注意もしくは意図的に傍線部が失われた。それを表現不足と感じた国が、独自に「たいめんしてためよし」を補ったのでは

ないか。

③ 三郎よしのりさへもんよりかたかもんのすけよりな
をさきとしてい上七人のことも (4—7)
2 5

大を除く広グループの他本には傍線部がないが、この形では「よしのり」「よりかた」「よりなか」三名を以て「い上七人」とする矛盾がある(佐は「い上」を「以下」とする)。当該部、大を含む他本では「三郎先生義憲左衛門尉頼賢掃部助頼仲六郎為家七郎為成八郎為朝九郎為仲已上七人の子共」(陽の本文に依る)(影 5—4)とあって矛盾がない。恐らくはこの形が本来であり、広グループのある段階で「六郎為家」以下の四名が欠落したのでろう。広・仁はその形を受け継いだが、国と佐は各々の方法で矛盾の回避を図ったと思われる。すなわち、国は「よりなか」の後に「をさきとして」を加えることで文意を通し、佐は「い上」(以上)を「以下」に改めた。

④ いかにかひしく思ふとも見ぬ事もあるへけれハ (5—1)
3 2 1 7

他本は、傍線部「いそくとおもふとも」「又ミんと思ふとも」「きつと見んとおもふ共」など区々だが、国と同じ表現はない。

⑤ てをあわせちゝはいづくにわたらせ給ふそたゝいま
いるそやまたせたまへとてこゑくゝにねんふつたからか
に申へしといへはおとゝともてをあはせねんふつたから
かにとなへければ

宝・東が近似する事例④として七頁に掲出した部位でもある。傍線部が国に固有。乙若が弟たちに念仏を勧め弟たちがそれに従う場面だが、陽明本系列の多くは傍線部を持たない。そのため、弟たちに念仏を勧める乙若の言が途絶し、弟たちが念仏を唱える場面へと飛躍している。これに対して国の形は文脈に不審がない。そうであれば、国は陽明本系列本来の適正な姿を残しているのかのように見える。しかし、ことはさほどに単純でないかもしれない。というのも、既に述べたことだが、宝徳本系列の宝・東もまた、陽明本系列の多くと同じ欠脱を生じ

ているからだ。ただし、宝・東を除く宝徳本系列の諸本は「手をあはせねんふつを申せよとをしへければ三人のおさなひものとも又めをふさきにしにむかひ手をあはせ父いづくにわたらせたまふそまいるとやまたせたまふとてこゑくゝにねんふつたからかとなへけれハ」^{3 9}（河の本文に依る）と矛盾がなく、陽明本系列の資並びに松井本系列（玄は一部を欠く）・金刀本系列の諸本もまた同じ形を伝えている（資については後述する）。おそらくこれが本来の形であり、陽明本系列はある段階で傍線部を欠落させたのではないか（宝・東との関わりについては不明）。そして、その欠脱を、国は独自の方法で補正したのでろう。大の処理法については前節の注（5）に述べた。

⑥ 九のへのくわらくをいてゝ²（8―17）
相当部、他本は「礼儀郷を辞して」（陽の本文に依る）
（影8―6）とする（伝本間の小異は無視）。「九のへのくわらく」（九重の花洛）は、諸本、忠実宛て師長書状中

(37—11) にも見える用語である。

⑦ くひねちきらんに何のしきいかあるへき入たうとのゝ

けうやうにたむけたてまつり (8—4)

傍線部、他本は「ねち切て」(陽の本文に依る) (影 293)

—9) とする。

以上、国に見られる固有表現のいくつかを掲げた。中で、

②③⑤については、欠脱の結果飛躍を生じていたであろう元の形を、独自の方法で是正した形跡が窺われる。

なお、固有語で注目されるものには次の如きがある。

① はんせうのそんい (九五尊位) (影 16—2) (1—9)

② うんなんはんりのくもち (「胡塞万里の雲路」) (影 26—8)

6) (6—10)

③ 綴喜 (「稲八妻」) (影 28—1) (7—8)

各項、国の字句を示し、() 内に他本に見られる語を陽を以て示した(表記の異同は無視)。②の「うんなんはんり」は諸本、崇徳院の遷幸場面(37—1) にも使われており、前掲の⑥と同様の事例である。③の「綴喜」は「稲八妻」とは別

地だが、稲八間のある相楽郡に北接する地。

以上まとめるなら、国は、陽明本系列の中では、特に純良な本文を持つとは言えず、欠脱並びに省筆を有する一方、小規模な加筆並びに微細な固有字句が見られる点で、比較的个人の強い伝本と捉えられるだろう。⁽⁵⁾

次いで大について述べる。該本は川瀬一馬氏『古写古出版物 語文学書解説』(昭和四十九年)、『大東急記念文庫貴重書解題』第三卷 国書之部(昭和五十六年)に解題がある。その中に、

「全巻に屋代弘賢の朱筆校正書入」のあることが記されているが、当該書入については既に述べたので小稿ではこの点には触れない。

まずは、欠脱(もしくは省略)について見る。該本には二十音節以上のものが六箇所存在している。

① 配流の後ハ讃岐院とそ申ける大治四年七月七日白川院崩御ならせ給ひて後天下の事をしろしめす忠ある者をハ賞し給ふ (影 6—2) (1—3)

② 此禅門諸道をけんらんして才文武を兼たり治龍二の政

に故実を存せし故に其人なくとも難治の次第成へけれハ

(影^{8 3}—2) (6—8)²

③ 縦百万騎の兵を以指向候とも無左右難防かるへし縦鉄

を延て楯につくといふ共 (影^{8 7}—5) (6—7)⁴

④ 馬より逆様に落けるか矢に荷われてしはらく落す馬お

とろきて (影^{2 5}—7) (8—4)⁴

⑤ 拳にて打のけれ共次第に力つかれけれハ心ハたけく

おもへ共おめくと生取られける (影^{9 7}—3) (8—8)³

⑥ ならハぬひなの御住居只押計るへし秋も漸深行ハいと

ゝ物こそかなしけれ (影^{0 9}—1) (9—10)⁶

本文引用は陽に依る。大は、②の傍線部を「しあひだ」と

し、③④については傍線部を持たない(⑤⑥については、

後に屋代弘賢が「長」と注記する写本を用いて傍線部相当記

述を行間に書き入れている)。④は、傍線部がなければ文意が

通じないので欠脱と判断される。また、②は改変を伴う省略、

③⑥は省略であろうか。⑤は「共」の目移りに起因する欠脱

かもしれない。①は傍線部がなく、「御ざいぬすでに

十八かねん」の文が入る。これについては後述する。上掲以

外にも小規模な欠脱もしくは省略が相当数見いだされ、また、

小さな誤りも存在する。

系列内でのみ固有との条件を付ければ、次の事項も加わる。

非常の断ハ人主守すと云本文有今度のむほん希代の勝事

也 (3—2) (影^{3 7}—5)³

系列中では大のみが欠くが、系統中では松井本系列が同じ

く傍線部を欠いている。

さらに、該本の場合、小規模かつ少数ではあるが、考証性

を伴った加筆や改変が存在するようだ。以下にそうした事例

を示す。

① 御はいるのちハさぬきのみんとぞ申ける御ざいぬす

でに十八かねんでんかの事をしろしめすちうあるものを

はしやうし給ふ (1—0)³

前に顕著な欠脱（もしくは省略）の①として掲げた部

位でもある。傍線部が他本にはなく大に固有である。「十

八かねん」は崇徳院の在位期間と一致するため、傍線部

は崇徳院についての加筆説明ということになる。他本は「申ける」と「てんかの事」との間に「大治四年七月七日白川院崩御ならせ給ひて後」（陽の本文に依る）（影6—2）との一文を有するが、大にはない。当該部は鳥羽院に関する一連の記事中にあるから、「てんかの事をしろしめす」云々も当然主語は鳥羽院である。それが、大では傍線部を加える一方で白河院崩御記事を欠いたために、「てんかの事をしろしめす」以下が崇徳院についての評言の如く読み取られる曖昧さを生んでいる。

② にんミやうハさがのくわうめんなりしかどもへいぜいしゆんわのみこたちをこえてほうそをつぎ給ふ（2—4）^{2 9}

傍線部、他本は「淳和の孫達」（陽の本文に依る）（影3—1）（旧古典大系本六十六頁頭注二の記すように「孫達」は「御子達」とあるべきか）とする。皇位は五十一代平城、五十二代嵯峨、五十三代淳和、五十四代仁明と継承されるので、嵯峨の皇子仁明が淳和の後を襲って即位したことを記す他本の形はこれでよい。大の場合はこ

れに平城が加わるが、菓子の変により平城の皇子高岳親王が嵯峨の皇太子を廃された事実を踏まえたものか。

③ んりんやく十三ねん十月廿一日にながおかのきやうより此へいあんじやうにうつされて（6—3）^{2 1}

平安京遷都の月日まで記す伝本は、宝徳本系統中では大のみである。ただ、他系統には大と同じ年月日が記されておき、それは『濫觴抄』や『賀茂皇太神宮記』等の記す遷都日と一致している。

④ ハまん太郎よしゑさだたうをせめご三ねんのたゝかひのとき（6—8）^{2 6}

傍線部が大に固有である。傍線部を付加したため文脈に不整合が生じている。「さだたう（貞任）」は、前九年の役に係わる人物だから、傍線部が「ご三ねんのたゝかひ」に懸かるものなら誤りである。事実誤認に基づく加筆か。

⑤ むまのときにをよんでしゆしやうはたかまつ殿へくわんかうなる（1—1）^{3 0}

傍線部、陽明本系列の他本は「本院は」「東院は」と誤る（資は「東院」を消して「主上」と傍書）。後白河を指す「しゆしやう」（主上）と記す大が正しい。他系列は傍線部を持たないが、なくても行文上の支障はない。

- ⑥ う大しやうかねながとて十九さいちうなごんのちうじやうもろなが十八さい（7—3）

傍線部、他本は「とて大將殿の御同年」（陽の本文に依る。（影²8—7）松井本系列は「大將殿の」なし）とする。この記載が正しく大のみ誤る。大は誤った資料に依ったか。

以上の如く、結果として不当な物も含むが、大には考証を基にした加筆・是正意識が働いているようだ。この他、考証性に由来しない加筆や書き替えもいくほどか見られる。

- ① しきぶのたゆふもりのりを御つかひにて御かうハ一ぢやうかみてまいれとてまいらせらるしんぬんもりのりを御前にめされてぢきに「へんたうありけりもりのりいそぎかへりまいりて御かうハ一ぢやうにて候と申けれハさ

大じん殿さらばとていそぎまいらせ給ふ（4—2）⁶

他本は「式部大夫盛憲を使者として（崇徳院が白河殿に御幸あつたか否かの一稿者補足）実否を聞見定すまして帰とてつかハされ盛憲急帰参して此よしを申けれハさはとて急参せ給ふ」（陽の本文に依る）（影⁷5—1）とする。小異はあるが系統内諸本ほぼ同文である。この形でも行文に問題はないが、大は、傍線部を付加することで要件を明確にし文脈を分かりやすくしたのではないか。他系統では、京図本系統が大に近似する本文を有している。大が京図本系統など他系統の本文を取り込んだ可能性も考えられるが定かではない。

- ② きうせんのすがたにててんじやうのミふだになをのこしける（6—7）⁴

傍線部、他本は「今日初て」（陽の本文に依る）（影⁸4—1）とする。

- ③ よゑんさだめてのがるへからずいかゞつかまつらん（8—1）²

傍線部が他本には見られない。

- ④ さ大じん殿の御ありさまくハしくかたり申ければてん
が御なみだながさせ給ひてわが身のさやうになるにつけ
ても (2—5)
3 2

傍線部が他本には見られない。

- ⑤ まさきようけたまハつてちよくちやうにはおやのくび
をきると申事ハふるきことばにて候 (3—2)
3 8
傍線部、他本は「かしこき者にて」(影 1—3) (陽の
2 6 1 2
本文に依る。松井本系列はなし) とする。

- ⑥ きたのかたきゝ給ひてげにゝわが身をすてたりとも
母こせん
3 8
(6—7)
傍線部、他本は「女房打うなつきて」(影 6—8) (陽
2 9
の本文に依る。松井本系列は「女房」を「母御前」とす
る。また、相当部を欠く伝本もある) とする。

③④は、行文をより丁寧にしたものといえる。⑤は、鎌田
正清が經典を根拠として義朝に父為義の斬首を勧める場面だ
が、その正清を「かしこき者」と記すことを不都合と感じた

ことによる改変であるかもしれない。

以上、大による本文付加或いは書き替えの事例を掲げた。
この他に注目すべきは、陽明本系列中、該本の本文のみが宝
徳本系列と一致する事例が僅かだが見られる点であろう。そ
の最も顕著な事例を示す。

(朱雀院は―稿者補足) てんりやくのみかどにくらゐを
ゆづりたてまつり給ひしか御こうくわいありていせへく
ぎやうのちよくしをたてゝおほせられたりしかどもつゐ
にかなハせましまさずしらかハのめんハほりかハのてん
わうにゆづりたてまつらせ給ひしがくわんちやくの御こ
ゝろにや (7—3)
3 5

とある部位、傍線部は陽明本系列中では大のみに存在する。
文脈上傍線部は必要であり、他系列の全てに相当文が存在す
ることを併せ考えるなら、陽明本系列中では、大のみが本来
の姿を留めており、これを持たない系列内他本は欠脱を生じ
たものと推測される。次に掲げる例も又同様かと思われる。

さきやうの大夫にうだうのりながひたちのくに四ゐのせ

うなごんにうだうなりずミあハのくにしきぶのたゆふもりのり入道さどのくにくらんどのたゆふつねのりにうだうおきのくにあふミちうじやうにうだうなりまさゑちごのくにとぞきこえける（8—15）
2
3

右掲文中、傍線部は陽明本系列中では大のみに存在しており、かつ他系列の全てに相当文が存在する。このことより、ここもまた陽明本系列中では大のみが本来の姿を留めているかと推測される。ただし、他系列では、傍線部の存在位置が「ひたちのくに」と「四ゐのせうなごん」との間である点が大と相違する。これについては、傍線部相当文がないことに気付いた大が、他本を用いてそれを付加したと考えられなくもない。陽明本系列中、大のみが宝徳本系列などの他系列と一致する本文を持つ事例はこれ以外にも見られるが、他は微細である。

以上のことより、大には陽明本系列のより本来的な姿が一部に留められている蓋然性があるとは考えられそうだ。

該本の性格をまとめるなら、ごく一部に古態を残すと思わ

れる一方、全体に亘って欠脱・省略が相当数あり、さらに小規模ではあるが、考証を伴った改変・加筆が存在する伝本ということになる。崇徳院・頼長は言うまでもないが、為義・義朝・清盛・為朝や乙若等にも敬語を多用することも特徴の一つに数えられる。

次いで広・佐について述べる。当該二本については既に検討を加えたことがあるので、詳細はそれに譲り、必要な範囲で再述する。

佐は、総体としては宝徳本系統陽明本系列本文に流布本系統の為朝説話を追補した伝本である。宝徳本系統に他系統の為朝説話を付加する点では、京師本系統や正木本系統と同じだが、これら二系統が宝徳本系統本文の後に京図本系統の為朝説話を付加するのに対し、佐は、宝徳本系統の為朝配流記事と崇徳院崩御記事との間に流布本系統の為朝説話を挿入している点が相違している。小稿では、佐については宝徳本系統本文部のみを対象とする。

広と佐は極めて近い関係にある。それを物語る顕著な事

例を掲げる。

- ① すてにほんくうせうしやうてんのうちよりひたりの御手とおほしきかうつくしけなるをさしいたさせ給ひて(1921)

本文引用は広に依る(以下同)が、佐も同文。広・佐以外では「せうしやうてん」と「のうち」との間に「の御前に御通夜有て現当二世の御祈誓あり(略)人定てのち證城殿の御簾の」(陽の本文に依る)(影1—6)との百音節を越える本文が存在する。この形が本来で、広・佐は同じ欠脱を生じている。

- ② 忠実宛て師長書簡(7—9)を、「一日乍押別涙罷出御所之後」と漢文体表記で書き起すが中断し、「一日へつるいをおさへなから御所をまかり出るの後」と再度書き下し文で始めている。そのため、前の部分が重出している。

- ③ けんそうくわうていハしよく／うらやましくそおほえける(略—ほぼ一丁分)都へのほり／さん(19)

されき(略—ほぼ二丁分) おきのかもめのともなふこゑ
／けり(9—6) (文中の斜線は私意で付した)

上掲文には錯簡が見られる。正しくは、(イ) ↓(ハ) ↓(ロ) ↓(ニ)と続くべきところである。

上掲以外にも、広・佐の間には共通の欠脱や誤りが数多く見いだされる。両本の近似は各丁における配行・配字にも歴然としており、上巻では、一面の配字がほぼ一致している(中巻第二十二丁あたりから両本の字詰めに差異が生じ始め、以後、佐に詰まりが見られる)。

以上の事実より、広・佐両本はきわめて近い関係にあることが了解できるが、本文の不備を補い合う事実が見られることより、両本は親子関係にはなく、兄弟もしくはそれに準じる関係にあると推測される。両者間の異同は、用字に関するものがその大半を占めるが、他に微細な字句の異同が百箇所弱見いだされる。二十音節以上の固有欠脱(もしくは省略)数を数えると、広には二箇所存在するが、佐にはそうした規模のものはない。この事実から判断する限りでは、佐の純

良度がより高いように思われる。しかし、微細な字句のレベルにおいては広の方に本来の姿が残されている場合が多い。となれば、顕著な規模の欠脱（もしくは省略）がないという点では佐が優れているが、細部については広の方が良いということになりそうだ。

結局のところ、広・佐の両本はかなり規模の大きい共通欠脱を持ち、かつ錯簡をも生じた伝本として捉えられる。しかし、大・国等に比べれば、固有字句は遥かに少ない。また、大・国両本に見られる固有字句には意改と思われるものがあるのに対し、広・佐の場合、誤解・誤写が原因で生じたと思われる類が多い。このことは、書写に際して、大・国に比し広・佐が私意を加えること少なく、親本により忠実であったことをものがたつていよう。その意味では、広・佐は該系列の本来性を探る一つの手がかりを提供する伝本といえそうだ。

次いで、仁について述べる。該本は、前半が宝徳本系統陽明本系列、後半が京図本系統根津本系列の本文からなる取り合わせ本である。冒頭より第五十三丁表東三条殿行幸記事ま

での宝徳本系統本文が考察の対象となる。

まず、本文の純良性の面から述べると、二十首節以上の欠脱は次の一ヶ所にとどまる。

隼の御社の前を過て先館の泉の鰭に壇を立て行僧有（影
4—9）（3—7）⁸
2

本文引用は陽に依る。仁は傍線部を欠くが、不注意による欠脱と判断される。この他には小規模な欠脱が数箇所見いだされる程度である。

仁の場合、宝徳本系統本文部が全体のほぼ三分の一であることを考慮しても、他本に比した場合の欠脱数は少なく、規模も小さい。もともと、誤写かと推測される字句は比較的多い。他本との親疎関係については、国と共通する部分が最も多く、次いで広・佐に近い。⁹仁と国・（広・佐）は現存本を幾段階か溯る時点で共通祖本にたどり着く関係にあるう。

結局、仁には国や広・佐のかなり大規模な欠脱（もしくは省略）を補える利点があり、目に付くほどの固有本文もない点からみて、国・広・佐三本より本文的には優れているので

はないかと思われる。宝徳本系統本文を有する部位が全体の三分の一程度であることが惜しまれる。

最後に零について述べる。該葉の残存部は、上巻頭より教長による源為義召致の途中までの三十八葉（中、絵二面）、並びに為朝献策の段二葉、及び挿絵六面である。全文のほぼ二割程度の残存状態となろうか。本文は、広グループに属し、中で広・佐に近いようだ。文字は流麗だが、欠脱についてはほぼ一葉分に相当する規模のものが二箇所⁽¹⁰⁾、十音節を越えるものが数箇所見いだされ、また、誤字も少なくないことから、本文的には優れたものとはいえない。付言すれば、該零葉はいわゆる奈良絵本と呼ばれるものだが、稿者が見及んだ他の奈良絵本はすべて流布本系統の本文を伝えており、その点、宝徳本系統本文を有する該葉は稀覯というべきか。

広グループに属する伝本の性格についての調査を終え、次いで陽グループ諸本の考察に移る。

陽グループ中、糸・天の両本はとりわけ緊密な関係にある。両者ともに同じ錯簡を有する⁽¹¹⁾。ほか、二本にのみ共通する字

句や欠脱（もしくは省略）が多数見いだされる事実がそれを端的に示している⁽¹²⁾。本文の純良性の観点から両者を比較すると、二十音節以上の欠脱（もしくは省略）が、糸では二箇所であるのに対し、天には八箇所見いだされる。天が中巻を欠く上下二巻の残欠本であることを考えれば、その純良度の差は明らかである。

糸における二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）は左の通りである

- ①（為朝は―稿者補足）仙洞にしこうして彼者ハ合戦の道におひてハさかくしき者にて候カ彼輩を引具して（影
 7 3 4
 8 3 2 6 1 5
 1）

- ② 内大臣実能公左衛門督基実右衛門督公能藏人少将忠近
 （影 9 4 0
 2 7 3）

本文引用は陽に依る。糸は傍線部を欠く。各々「彼」「能」の目移りに起因する欠脱と思われる。

次に天における二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）は左掲の通りである。

- ① 国富民安しされハ恩光あたゝかに照して国土皆豊饒なり
(影 6—6) (1—4)^{2 3}
- ② 碧玉の床の上にハ古御衾空残珊瑚の枕の下にハ昔をこふる御泪いたつらにつもれる (影 1—0)^{2 4} (2—5)²
- ③ 当関白忠通公と申ハのちにハ法性寺の大殿とも申き(影 2—1)^{5 6} (2—5)^{2 1}
- ④ 六波羅の前をゆき通兵共是を見て左大臣殿御通のよし内裏へつけ申て車を押留たり (影 5—7)^{2 6} (4—8)⁵
- ⑤ わきくのの小門をハ次々の兵共各是を承て思々に固たり
(影 6—1)^{1 9} (4—2)^{2 1}
- ⑥ 思ひける心の中こそ悲しけれ又乙若殿波多野に云けるハ
さても我ハ(影 5—6)^{3 6} (6—9)^{3 0}
- ⑦ 格勤二人候けるかめのと四人腹切を見て我等もいさや御とも仕り冥途の御道しるへ申さんとして同指違て死にけり
(影 6—2)^{1 3} (6—4)^{3 6}
- 本文引用は陽に依る(⑦は陽明本系列の共通異文)。各々において天には傍線部が存在しない。これら①～⑦について

見ると、②④は各々「の」、「通」の目移りに因る欠脱かと思われ、③についても傍線部がないと意味が通じないため、やはり欠脱と考えられる。また⑤も欠脱であろう。ただし、①⑥⑦については、意図的省略も考えられる。

これに加えて、

承平に将門純友東西に乱逆をいたし天喜に貞任宗任謀叛を企て或ハ八ヶ国を討取て八ヶ年責戦或五十四郡を虜掠十二年防しかとも(影 8—1)^{2 1} (6—6)⁵

についても、天は傍線部を欠く。当該部、津を除く松井本系列はこの辺りを大きく欠いており、天に固有の欠脱ではないが、欠く範囲が異なるので、両者の間に関係はないと思われる。天の場合、「或ハ」「或」の目移りによる欠脱と思われる。

こう見てくると、天の欠く記述の多くは不注意による欠脱と判断されるが、中には意図的省略も含まれているようだ。固有字句については両者ともに顕著なものは認められないが、いずれかといえば、天の方に比較的多くを見いだすことができるので、いくほどか天の方に改変意図が見られるようだ。

そうであれば、糸の方により本来性が残されていることとなる。勿論、糸の誤りや不備を天によって補正しえる部位があるので、天に対する糸の優位性は相対の域を出るものではない。両者は直接の書承関係にはなく、現存本をいくほども溯らない時点で共通の祖本にたどり着く関係にあると考えられる。

次いで、宮について述べる。該本は、宝徳本系統陽明本系列本文の後に京図本系統の為朝説話を付加した取り合わせ本である。永積分類では正木本系統に属する。小稿では、宝徳本系統本文部が対象となる。

まず、本文の純良性の面から述べる。対象部位には二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）が三箇所見いだされる。

以下に示す。

- ① 清盛宣旨を承て此陣に^{（影 110）}向て候とたからかに名乗けれ
ハ八郎是を聞て取あへす申けるハ院宣を承て此陣をかた
めたる鎮西藏人為朝也（影 113）（75）（215）
- ② 義通入道殿の御使に参たりと申けれハ我もくと走出

たり義通申けるハ入道殿ハ舟岡山に籠給て候か（影 243）
7（54）
3（51）

③ 欲去万里之雲路奉親敵何日乎自非暗夢者更不知其期（影 285）
285
810（83）
3（81）

本文引用は陽に依る。右掲の①③において、宮には傍線部が存在しない。①は陽明本系列の共通異文だが、宮の形では、「承て」が為朝を清盛の下位に位置づけるように機能することになり適切とはいえない。宮の欠脱と判断される。「入道殿」の目移りによる欠脱と思われる。③の場合、宮は書き下し文だが、傍線部を欠く宮の形では文意が通じない。これもまた不注意による欠脱と思われる。

これに加えて、

或時ハ多いやと云て興を推居けれハちともはたらかぬ時
もあり或時ハ多いやといひて身を打ふれハ（影 02）（93）
10（1）

についても宮は傍線部を欠く。ただ、松井本系列もより広範囲を欠いている。その意味では宮固有とは言えない。しかし、

宮の場合は「多いやと云て」「多いやといひて」の目移りに因る欠脱と推測され、松井本系列とは欠脱の原因が異なると考えられる。

この他には、十音節を越える欠脱が数箇所見いだされる。

また、文節規模あるいはそれを少々上回る程度の誤りが点在しているが、総体としては比較的誤りの少ない伝本といえる。

固有性に関しては、顕著なものは見いだされない。目に付くものとしては、

其よりして新院左大臣殿の御謀叛一定也けりと披露しけ

り（本文引用は陽に依る）（影⁶4—1）（3—9）²

との一文の存在位置が他本と異なっている点が指摘できる。

該文は、他本では、朝家呪詛の嫌疑で三井寺僧勝尊が捕縛された記事の結びとして用いられているが、宮では、教長の崇徳院説得が不首尾に終わった記事の結びとなっている。宮の位置でも大きな難点はないと思われるが、この現象が、宮の作為であるか、書写時の物理的な因によるものかは分からない。なお、宮は、傍線部の「披露しけり」を欠いている。省

略と見ることは可能だが、おさまりは悪い。

この他に微細な固有字句が少々見いだされるがとりたてて記すほどのものはない。

むしろ、該本で注目すべきは、陽明本系列諸本中、宮のみが系列内の他本と異なり、宝徳本系列などの他系列と合致する現象がいくつか見いだされる点であろう。以下にそうした例を示す。

① 平氏のらうとう源氏をうち源氏のらうとうへいしをう

たすんは合戦候へきや平氏のらうとうのい候やの源氏の

御身にたゝぬやうや候（8—5）²

② 血もなかれず疵もなし心すこしあんとしてさりけなく

もてなし八郎ハきゝしにもにさる矢かな（9—4）²

③ 袖をしほりけるところに黒ミたるすいかんうちかけた

る人月にさそハれけるにや御所の中よりたち出たり（9—4）³

—7¹

④ 禅衆もなければかいかねのをとせす後夜晨朝に念仏

する僧侶もなければ三聲のひゝきもきこえず（0—10）²（大

は「後夜晨朝」以下を別筆で行間に書き入れている)

- ⑤ みかゝれし玉のうてなを露ふかき野辺にうつして見る
 そかなしきかやうにかきつけおもひつゝけてなミたのを
 こい時うつるまでつくく候けるか又なくくとき
 けるハ (40—9)

宮の本文を掲げたが、①⑤において、宮を除く陽明本系列諸本は傍線部を欠いている。しかし、宮のみは宝徳本系列を初めとする他系列諸本と同様に傍線部を有している(ただし、①については、宝徳本系列の支も同部を欠き、松井本系列の九・実も欠く部位が宮と一部重なる)。⑤の場合はいくぶんか問題があるが、他の場合は傍線部がなくても行文上の支障はない。従って、傍線部を持つ形、持たない形のいずれが本来であるかは決しがたい。ただ、①は「らうとう」、②は「なし」、④は「なければ」の目移りに因り不用意に傍線部を欠落させた蓋然性が高い。そして、陽明本系列が宝徳本系列の後流に立つとの犬井説に立脚するなら、宮並びに他系列の姿が本来で、傍線部を持たない陽明本系列の大多数の伝本の形は

後出と位置づけられる。陽明本系列中、宮のみが他系列と合致する現象は小規模なものまで含めると上掲以外にも十数箇所見いだされる。となれば、宮には、宝徳本系列の如き伝本(宝徳本系列諸本中には、他系列に対して絶対的に優位に立つ伝本は存在しない)から陽明本系列が派生する過渡の姿が残されていると考えられるのではないか。

次に資について述べる。該本は、宝徳本系統陽明本系列の本文に京図本系統の為朝説話を追補した、宮と同形態の取り合わせ本である。小稿では宝徳本系統本文部のみを対象とする。

まず、本文の純良性に係わつては、対象部位に二十音節以上の固有欠脱(もしくは省略)が五箇所見いだされる。

- ① せめて廿年の御宝算をたにも持給ハす纔に十七年の春秋を送かねて (影 1—7) (1—3)^{2 7}

- ② 実否を聞見定すまして帰とてつかハされ盛憲急帰参して此よしを申けれハさらはとて急参せ給ふ (影 5—2) (2—6)^{2 4 6}

③ 御先打しける家弘是をみ奉猶先に有ける平馬助か松崎

のかたへ落けるを呼返して（影^{1 6 3}—2—）（0⁶—5—）

④ 御意の通する事世にかくれなしもし御使なんとを指遣

ハさるゝ事もやとの御用意にてそ有らん（影^{1 7 7}—6—）（1⁴—）
3 1 4

—2
1）

⑤ 波多野二郎ハ未此事能も心得すして鎌田か袖をひかへ

て云様や殿ははいかなる御事そ此事惣して心得すさてハ

失たてまつるにこそあらんなれ（影^{2 0}—4—）（4¹—6—）
3 1

本文引用は陽に依る。右掲の①～⑤において、資には傍線

部が存在しない（②については、松井本系列の龍も「さらは

とて急参せ給ふ」を欠く。また、⑤については、松井本系列

も傍線部の一部を欠く）。①は「年の」、②は「とて」、③は「け

る」、④は「事」、⑤は「心得す」の目移りに因る欠脱かと推

測される。この他、

弓矢取ものハ親ニ過たる方人なし彼等四人生をきたらハ

よき郎等百人にハかへましき也（影^{2 4}—0—）（4³—2—）
2 1 3 3 1 2

も加えられようか。津を除く松井本系列もこの辺りを大きく

欠いており、厳密には固有の欠脱ではないが、欠く部位が異

なっているため、両者の間に関係はあるまい。資の場合は、

意図的省略かもしれない。その他、字句レベルでの誤りや欠

脱が全体に亘って見られる。

次に固有性に関して述べるなら、小字句のレベルでは相当

「数見いだされるものの、大規模のものはない。

注意を払うべきは、貼り紙一紙を含め行間に多く存在する

書き入れだろう。それらは、補正・校合・欠脱の補入など種

々の性格のものが混在しているようだ。たとえば

① 入道殿ハ舟岡山ニ籠給て候か〇とおもふとも見ぬ事も

有へけれハ（5²—6—）（書き入れ「軍有」の左に「合戦」
3 1 6

とさらに傍書）

② 兄の殿へらをこそ〇何のゆへにか失たまふへき（5³—）
3 5

—1—

③ けうとけなる者のふともの近付参て御

〇悲給ふまことにことわりとぞ覚し（7³—1—）
3 0 1 1

等は、行間書き入れを含まないと文脈に飛躍を生じるので、

本文であることも、本紙本文と貼り紙本文が依った伝本が同一本ではなかったことを示唆している。

また、資固有の書き入れと思われるものもいくほどか存在している。

- ① さはなくして○我馬馬をとうとふさせの腹を射させたるそや（⁹—⁹）
 ② さりとてハ○哀々給ハさらんや仁和寺の五の宮へ潜幸成へし（¹—⁶）
 ③ 下野殿親父○出家入道してかうさせらるゝ判官殿を切たてまつられ候事（⁵—¹）

— 8 —

①については、書き入れに相当する字句が同系列の他本には存在しない。他系列では「馬を押倒て」などとある。②③は宝徳本系統は勿論他系統にも同記述もしくは相当記述が見いだされない。これら書き入れが資の創作であることも考えられる。

書き入れを考える上で、まず問題となるのが、すべてが同筆か或いは異筆も混じるのか、さらに本行本文と同筆か否かという点であろう。しかし、これを見極めることは中々の難事である。資の場合は、中に異筆も混じるようだが、素人目

には、その多くが一筆でかつ本行本文とも同筆であるような印象を受ける。ただ、原本を確認していないのでおぼつかない。細密な検討が必要である。

該本についてもう一点注目すべきは、前述の宮と同様、陽明本系列諸本中、資のみが宝徳本系列などの他系列と合致する現象がいくつか見いだされる事実である。以下にそうした例を示す。

- ① 兄弟の中不快也ける間いまこそ落合処よと思けれハ殿
 ハ景親をハさせるとかもなけれとも不忠の者として常ハ不
 審し給へともまことの時ハ景親こそかゝるせんとにも合
 奉れ他人ハ誰かたすけたてまつるへき明暮小目みせ給ひ
 たる事ハいかにこり給ひぬやといひけれハ景能をめぐ
 と成てよしや殿日来ハともあれかくもあれ今より以後ハ
 わ殿ニ過たる奉公の人やハあるへき何事成ともの給ハ
 事に随ハめといひけれハさらは余所へつれ参候へきとて
 又昇負て出にける（⁹—⁵）
 2—1）
 資の本文を掲げた。陽明本系列の他本は、傍線部が「此

詞を不用して罷出なハ兄の恨死後迄も残へしと思けれハ
けにも御理也他人ハ誰か扶申へき」(陽の本文に依る)(影
4 | 3)と簡略である。他系列は小異はあるが資と同形。
1

② (乙若は三人の弟たちに―稿者補足) めをふさき手を
合念仏申せとをしへけれハ三人の者とも又目をふさきに
しに向て父ハいつくにわたらせ給ふそ只今まいるそや(5 9
3 5 9

―7)

七頁及び二十九頁で取り上げた部位だが、資を除く陽
明本系列諸本には傍線部がない。その場合、弟たちに対
する乙若の言が中断し、弟たちの行動に場面が飛ぶ不手
際が生じる(国・大が、各々の方法で矛盾を回避してい
ることは既述)。他系列では、宝徳本系列の宝・東が同じ
く傍線部を欠くが、それ以外は資と同形である(松井本
系列の玄は「三人の者とも又目をふさきにしに向て」を
欠く)。

これら部位についてもやはり資並びに他系列の姿が本来で、
陽明本系列の多くに見られる傍線部を持たない形は、欠脱を

生じた後出の形と判断できるだろう。とすれば、該本もまた
宮と同様に、部分的ではあるが、宝徳本系列の如きから陽明
本系列が派生する過渡の姿を伝えていると考えられるのでは
ないか。

僧坊のありけるに入進せたりけれハやかてひれふさせ御
座す家弘とかくしてをもちいとなみ出してまいらせ上けれ
ハ(1 6
3 1 6

資の本文を掲げたが、陽明本系列中では宮が資と同形で、
他は傍線部を欠く(大は欠く部分に異同がある。また、国は
傍点部を「くふしいたして」とする)。他系列は資・宮と同形
である。

右の事例もまた、資が宮と共に陽明本系列のより古い姿を
一部に残す現象と認識できるのではあるまいか。¹⁴⁾

最後に陽について見る。該本の場合、二十音節以上の欠脱
は二箇所存在する。

① なかゝのさいとうへつたうおなしく三郎たんちなりき
よはんさハ六鬼王にハしやうの太郎おなしく三郎ちゝぶ

のむしや (6—8)
2

② ミやうかのつきむするはいかに八郎あさわらひてため

ともかあにゝむかつて弓をひくかミやうかつき候ハ、いかにきてんハけんさいのちゝにむかつて (8—8)
2 9

本文引用は広に依る。陽は傍線部を欠くが、①②ともに各々「三郎」「ミやうか」の目移りに因る単純な欠脱と判断される。

この他に、

しゆしやういくさにかたせ給ハ、なんちをたのむてわれ

ハまいらんあんいくさにかち給ハ、我をたのみてなんちハ

まいれ (9—5)
2 0

も挙げるべきかもしれない（欠く部位が宝徳本系列の彰・中と一部重なる）。陽は傍線部を欠く（「しゆしやう」（主上）は行間書き入れ）が、この場合も、「いくさにかたせ給ハ」、「いくさにかち給ハ」の目移りに因る欠脱かと思われる。

その他、小さな誤りがいくほどか見いだされることは他本と変わりが無い。なお、注目するほどの固有本文は見あたら

ない。

以上の考察結果をまとめれば次のようになろうか。

一 陽明本系列を特徴づける共通異文は、三巻本でいえば、上巻後半から中巻に集中している。

二 陽明本系列の諸本は、本文の親疎関係より、さらに陽グループと広グループに分けることができる。

三 陽グループは上巻部に重点的な改変を施すが、広グループは積極的な本文改変の意図を持たない。

四 広グループ中、国は、比較的個性の強い伝本である。

大も同様な性格を持つが、ごく一部に系列のより初期的な形を留めるか。広・佐両本は緊密な関係にあり、規模の大きい欠脱や錯簡を共有しているが、本文改変の意図は少ない。仁は宝徳本本文部が総量の三分の一程度という限界を持つが、本文は比較的純良である。零は欠脱が多く、本文的に優れていない。

五 陽グループ中、糸・天が緊密な関係にあり、本文的には糸が優れている。宮は比較的誤りが少なく、資は欠脱

が目立つが、ともに系列のより初期の姿を比較的多く伝えている蓋然性がある。陽は、系列中では固有の誤りが最も少ない。

『保元物語』系統細分に当たり初めて系列の概念を持ち込まれた大井氏は「善本もしくは古い写本を以てて」各系列の名称とされた。とすれば、陽明本系列との命名は系列伝本中、陽を善本と認められたことによると判断される（陽に書写年次の明記はない）。この度の追調査においても、陽は、同系列の他本に比して、誤りの規模も小さく数量も少ない、また、固有の改変もほとんどないことが確認できた。氏の判断をほぼ妥当と結論づけてよいと思われる。ただし、問題がないわけではない。該系列がさらに陽・広の二グループに分かれたれることは前に述べた。陽グループが為朝の経歴紹介部に大きな欠脱を生じていることも前述した（注（1）⁶）においても言及〕。当該欠脱は宝徳本系列の一部や金刀本系列にも見られ、陽グループに固有ではないが、広グループに比して看過できない大きな欠陥であることは否定できない。また、広グルー

プに比して陽グループがより改変の進んだグループであることも明らかになった。一体、善本とは何なのか。それはいかにも規定されるべきか。要件の一つとして欠脱や誤写が少ないことがあげられよう。しかし、それだけでは不十分である。系統もしくは系列内諸本中、固有性が少なく、最大公約数的な要素を最も濃厚に有することが大きな要件ではないか。それは、換言すれば、系統もしくは系列中最も個性の希薄な伝本ということになる。こう規定することが許されるなら、改変意図がより濃い陽グループに属する陽を代表伝本に据えることにある種の躊躇を感じる。この点については今後の課題としたいが、「善本」「素性の善い本文」なる用語も、その使用に当たっては概念規定をより明確にする必要があると自戒を込めて思う。

さて、宝徳本系統の古態が宝徳本系列に最も濃厚に残存しているとの前提に立つならば、系列分派のごく粗い捉え方としては、現存本で言えば宝徳本系列に近い形から、上巻後半・中巻に重点的に独自の増補もしくは書き換えを施した陽明

本系列の祖本が派生した。それは、さらなる欠脱を生じた河グループへと降る一方で、上巻に重点的な改変を施した陽グループへと分岐したと捉えることができる¹⁶。

〔注〕

- （1）①②は「杉原本『保元物語』本文考—三系統本文混合の実態—」（『国文学言語と文芸』昭和五十一年七月）、③④は「宝徳本系統『保元物語』本文考—四系列細分と為朝説話追加の問題—」（『和歌と中世文学』昭和五十二年）に掲出。

- （2）陽・広の二グループ区分も、もちろん最大公約数的な立場を出るものではない。細部についてはこの区分法に適合しない箇所も少なくない。次に挙げる部位はそうした中で最も顕著なものである。

鳥羽の禪定法皇とそ申す天照大神四拾六世の御末
神武天皇より七十四代二当りたまへる御門なり（影
3 3 1 1 3
2 1 1 1 1）

宝の本文に依ったが、宮・陽・大・糸・天・零は傍線部を欠く。宮・陽・糸・天は陽グループに属し、大・零は広グループに属するため、該箇所は上記のグループ分けに抵触する。

- （3）『中世文学の成立』（岩波書店 昭和三十八年）

- （4）広グループにおける主な共通欠脱（もしくは省略）は次の通りである。

- ① 御たい状を書て職弁官にたふ恐をなして給
ハ、さりければ（影^マ2 9 2）（2 8 3
2 1 1）

- ② 宇治路をハあきの判官もとより淀路をハ周防
判官季実（影^マ3 5 6）（2 3 8）（零は「基盛淀
路をは周防判官」を欠く。また大は傍線部を別
筆にて行間に補記している）

- ③ 判官出向て色代して申けるハ為義いやくも弓
矢の家に生れ（影^マ5 1 1）（4 6）（国は傍線部
「たいめんしてためよし」）

- ④ 居なから御返事を申され子息ハかりを進られ候

はん事いかゝあるへく候はん (影 5—3) (4—3)
1) 4

本文引用は陽に依る。上掲四項目において広グループは傍線部を欠いている (グループ内で異同がある場合は適宜各項に示した)。①②は欠脱と見られるが、③④は省略かとも思われる。

(5) ① 御車にハ昔給料登宣 (影 5—7) (4—6)
2

② 遠ハ異朝を訪に昌邑皇賀ハ胡国に帰され玄宗
帝ハ (影 0—4) (9—6)
3 3

本文引用は陽に依る。各項について国では傍線部が空白となっている。親本もしくはそれを溯る段階で何らかの原因によって不読となった部位を空白で残したものと考えられるが、こうした点はある意味での国の厳密性を示すと言える。

(6) 『保元物語』書写・購求・考証・利用の諸相—江戸時代における古典学・古典籍愛好の一齣— (徳島大学総合科学部「言語文化研究」第十五巻 平成十九

年十二月)

(7) 『保元物語』写本目録稿、「保元物語」写本目録稿補遺 (徳島大学総合科学部「言語文化研究」第六巻、第十五巻 平成十一年二月、平成十九年十二月) 広における二十首節以上の欠脱 (もしくは省略) 部位は次の通り。

① 軍功勲賞にも申替て父一人か命をハなとかハ助
さるへき我たにも助なは (影 0—5) (3—3)
2 3

② 御車を引向させて何とか申させ給ひけん御涙に
むせハせ給ふとハかりこそ御車のよそへハ聞け
れ (影 7—6) (7—10)
2 4 1 3

本文引用は陽に依る。各々において広は傍線部を欠く。①②は各々「にも」「せ」の目移りに因る欠脱だろう。また、上掲以外に左の事例も加えてよいだろう。

指違て死にけりかゝりけれハ舟岡山にて主従十人
ハ失にけり波多野次郎頸共持て (影 2—6) (4—3)
2 1 3 6

5)

松井本系列も当該部を含む周辺を大きく欠くが、広との間に関連性はないだろう。広の場合、「にけり」の目移りに因る欠脱か、省略かは判然としない。

（9） 仁・国における顕著な符合例を示す。

- ① 照日光如来ハ御壽命十年住無住如来ハ僅に一日一夜也月西如来ハ唯一日也朝に出て夕に入給ひしかハ（影²1—4）（1—9）⁷
- ② 狼藉法にすきければ九国挙て訴けれハ或ハ為朝ニ宛て（影⁶1—6）（5—7）⁴（傍点部を国は「ためよし」と誤る）

③ 下野国にハ八田四郎常陸国にハ中郡三郎閼次郎甲斐国にハ志保見五郎（影³9—10）（6—14）² 8 14

本文引用は陽に依る（ただし②は宝に依る）。①②③において仁・国は共に傍線部を欠く（②を含む前後を、宝徳本系列の河・学、陽グループ、金刀本系列の金・理・博は大きく欠く）。①は「如来ハ」、③は「にハ」の目移りによる欠脱かと推測される。②は省略か。こ

うした仁と国との符合に比して、仁と広・佐との符合は単語レベルの微細なものにとどまる。仁が国から離れ広や佐などと近似する部位は、国に独自の改変が推定される部分である。

- （10） 「しやらさうしゆのもとにして・なかりし御事なり」「たうしのせけんをあん・ちんりのうれへをいたける」の二箇所。・印は稿者が加えたものだが、・印の部分、小学館本にして各々、²2—10³、²2—10⁴、²2—9⁵、²2—7⁶、²2—3⁷に相当する記述が欠落している。

（11） 上巻の「みるよしきこえける」（本文は糸に依る。

傍線部、天「な」から「あふみの国かうか」までの部分（²2—8⁵、²2—4⁶、²2—10⁷）は「高松殿をうかうい」と「山にたてこもりて」（²2—10⁸）の間に入るべきものである。なお、糸にはもう一箇所錯簡がある。中巻の「渡し奉り」から「以嗽意」までの部分（³0—14⁶、³2—7⁷、³2—8⁸）は「嵯峨の方へ」と「乱入之条はなはいはれなし」（³2—8⁹）の間に入るべきものである。後者について

は天は欠巻である。

(12) 両者に共通する二十音節以上の欠脱は次の通りである。

る。

① 御寿命一百廿七歳なり其後の帝王百十四年或
一百廿余年など也 (影 1 1 0 2 1 6)

② 一天の君の宣旨にこそしたかひたまへめおり
ゐの帝の院宣にしたかひ給ふへき (影 4 0 4 2 3 5)

— 8 —

③ 波多野小次郎安房国にハ安西金鞠沼平太丸太
郎上総国にハ介八郎 (影 9 3 2 2 6 8 5)

本文引用は陽に依る。糸・天は傍線部を欠く。すべて不注意に起因する欠脱と判断され、両者の共通祖本の段階で既にこれら欠脱が生じていたことが分かる。

(13) 行間書き入れについては、本行本文と同筆か否かが問題となる。異筆なら、これらもまた、資固有の欠脱に加えるべき性格のものである (二十音節以上のものはこの三箇所)。同筆のような印象を受けるが、確信

はない。

(14) 宮と資並びに院 (・正) の関係について記しておく

たい。宮と資は宝徳本系統本文の後に京図本系統本文をもつて為朝大島渡し以後の記事 (いわゆる為朝説話) を追補した取り合わせ本という点で一致している。同様の形態を採る伝本として、他に正・院がある。その中、正と宮は永積分類において正木本系統との命名で立統されている。院・資も正・宮と同形態であるため、これら四本を正木本系統として一括し得るかとなれば、それはできない。以下にその理由を記す。正は未見のためこれを保留し、宮・資・院の三本について記す。これら三伝本における宝徳本系統本文部を詳しく見ると、院は松井本系列、宮・資は陽明本系列と、異なる系列の本文であることが判明する。追補されている為朝説話もまた各本で素性が異なる。三本ともに京図本系統根津本系列の本文を有する点では一致しているが、子細に見るなら、宮は龍谷大学図書館蔵本・京

都国立博物館蔵天正二十年奥書本・仁和寺蔵本により近く、資・院は筑波大学附属図書館蔵根津文庫旧蔵本・蓬左文庫蔵平仮名交本により近い。

要するに、当該三本は同形態ではあるが、それは結果的現象に過ぎず、それぞれに成り立ちの経緯を異にしている。従って現存本を遡る時点で（少なくとも院と宮・資は）単一の共通祖本にたどり着く関係にはない。よって、これらを正木本系統として一括することはできない。ただし、正は未見のため、宮・資・院三本と正との関係については分からない。正と宮が「完全な同類同種本である」との永積氏の指摘が正しいならば、正と宮は正木本系統に属するが、これに資を加えるべきかについては微妙である。

(15) 「宝徳本系統『保元物語』本文考―四系列細分と為朝説話追加の問題―」（『和歌と中世文学』 昭和五十二年）

(16) ただし、多様を極める伝本間の本文異同の中には、

小稿での捉え方に抵触する現象も存在する。この点一言しておきたい。

残所なく打随へて上よりも給らさる九国の輩大略付随て上へきよし申けるを（影7―1）

為朝の経歴を縷述する部位である。陽の本文を引いたが、陽グループには文脈に大きな飛躍が見られる。このことは、資の性格を考察する中で既に指摘した。当該部、他本には

のころとなくうち随て上よりもたまはらさる九国の惣追輔夫補佐カと号して鎮西を張行ひ狼藉法にすぎければ（略―この間、小学館本にして約六行分）参て陳申さんよしとて俄二上路しけれハ九国の輩大略ともすへき申けるを（宝の本文に依る）（影1―4）（5）
4 6 7
2 5

とある。これと比較する時、陽グループは他本の如き形の傍線部を恐らくは「九国の」の目移りに因り欠落させたものと考えられ、陽グループの形が生じた経緯

は容易に推測される。広グループには欠脱がないことより、陽グループの早い段階で欠脱が生じ、グループ内五本がこれを継承したと見られる。ただ、そうした捉え方をした場合ある不審が生じる。宝徳本系列の河・学（文を除く金刀本系列も同じ）もまた相当部を欠いているからだ。この事実をどう解釈すべきか。陽明本系列が宝徳本系列の如きから派生したとの前提に立つ時、陽明本系列の共通祖本の位置にある伝本が既に河・学の如く欠脱を生じていたと考えた場合、広グループに欠脱を生じていないことの説明がつかない。また、陽明本系列の祖本の時点では欠脱がなく、陽グループの祖本の時点で欠脱が生じたと仮定した場合は、宝徳本系列の河・学に同じ欠脱が見いだされることにある種の不審が残る。もともと、当該欠脱は目移りという単純な原因により生じたと考えられるので、河・学と陽グループに同じ欠脱が見られることを偶然と解釈することは可能である。宝徳本系列に近い形態を持

つ伝本中の、欠脱を生じていない一本から陽明本系列が生じ、その後の流動の過程で陽グループに欠脱が生じ、それが河・学と偶然一致したと考えるならば辻褄あわせはできそうである。不審は残るが、一応このように理解しておきたい。同様な現象がもう一箇所存在する。

四方の門をとちて（「たたけ」脱か）とも人もなし
兎角捜るに角振隼の御社の前を過て（影⁴ 4—8）
の部分である。陽の本文に依ったが、右の陽グループの文章でも行文上支障はない。ただし、他本では

四方の門を閉て叩とも答す東西の小門を打破て入
て見れとも人もなしとがく索り求るに角振隼の御社
を過て（影³ 8—7）（宝の本文に依る）（3—5）
² 8

とあり、これと比較すれば、陽グループが実線部を欠いていることが分かる。この場合も宝徳本系列の河・学（文を除く金刀本系列も同じ）が同様に実線部を欠いている。当該部についても、実線部を持たない原因

が恐らくは「とも」の目移りに求められようから、前掲事例と同じく、陽グループと宝徳本系列の河・学との符合を偶然と考えることは許されよう。ただ、この場合は一層込み入っており、広グループは「見れとも」を「見るに」とし、かつ破線部を欠いている。宝徳本系列の如き本文を引き継ぐに際し、陽グループは実線部を欠落させ、広グループは破線部を省略或いは欠落させたと考えるべきか。

三、松井本系列の諸本

松井本系列に属する伝本としては、九・院・実・玄・松・昭・早・蓬・神・原・龍・津の十二本が該当しよう。ただし、早は全三巻中、下巻のみの残欠本であり、蓬・神・原並びに龍は取り合わせ本であるため、各々、上巻頭より後白河勢出撃記事までと、上巻頭より中巻の法勝寺焼き討ち不許記事までが考察の対象となる。また、院については巻末の為朝

説話を除く。

該系列の共通現象としては次の八項を掲げたい。

- ① 高祖父大和守たりしよりをく⁷の郡⁶二居住して未武略の名をおとさす（影⁷ 7—1）（3—1）^{2 3 6}
- ② 射はつしたる事未³一度もなきものを此馬⁶の矢のあたりやうをみるに主ハよも死せしこれ等ハすひ分目恥かしき者共ニであるものを人にかた⁴らむ事のはつかしき⁴よ口惜き事哉とそつふやきける（影⁴ 8—1）（9—1）^{2 4}
- ③ 嗟々として行方をしらす眇々として遙のみちニ出ニけり蒼梧の煙のなひく方ニたくひ白楊の霧いつくをさしてかたつぬへき（影¹ 7—1）（3—7）^{3 4 5}
- ④ 皆涙をそ流ける其中ニ波多野次郎赤威の鎧の袖なるゝ涙にすゝかれて洗革とや成ぬ覧又乙若殿云けるハあの少者共の髪⁶の顔ニかゝりたる熱けさよ推上げてゆへかしと云けれハ乙若殿にハ源八（影⁶ 0—1）（5—3）^{1 3 6}
- ⑤ 皆腹をそ切てける天王殿の格動一人自害す乙若殿格動^動一人自害すかゝりければ船岡山にても主従十人ハ矢ニけ

り | ⁸(影 1—7) ³(6—4)

⑥ はかなきためし余所の哀ときゝ置しハ船岡山の事也けり嵯峨うつまきにまいりてさまをかえんとおもへとも(略) 川の中へそ入れてける (影 ⁴2—⁶2) (⁶6—³3)

⑦ 浮世ニつれなくなからへは子ともの年をかそへても今年ハそれはいくつゝ子ともに似たる人を見てもあらましかハとこひしくハ切りけん者のうらめしさよ被切子とものいたわしさよ思つゝけて一時も世ニあるへし共不覺⁵(影 ⁶2—⁵5) (⁶6—⁴1)

⑧ 仏経を修読するをハ皆被許てこそありしか後世の為にとて奉書たる大乘経の敷地をたにも被惜にはさても後世までのなけきこさんなれ (影 ⁶8—⁹8) (⁹9—⁴1)

本文引用は便宜的に宝に依る。松井本系列は、①②④⑤について傍線部を欠き、③は「行方しらすそなりにける」(松に依る。以下同)、⑥は、宝にして七行弱に亘る相当部が「はかなきためしときゝおきしハいま身のうへのことハリ也」、⑧は「経典を書写し安置したてまつらんををてをや」と、各々

簡略である。また、⑦については相当記述を持たない。

犬井氏は松井本系列の特徴を十九箇所に亘つて摘出される^{〔1〕}が、稿者は上掲の八項をもつて該系列認定の目安とした。その根拠を以下に述べる。上掲十二伝本中、津・院の二本は、犬井氏提示の分類基準では属すべき系列がない。ただ、松井本系列認定の指標十八項中(十九項中、一項は該当しないのでこれを除外する)、院は十六項、津は十二項が適合しているため、これらは松井本系列に最も近い位置にある伝本と認識される。津・院を属させるべき系列がない現状への方策としては、新たな系列を設けることも考えられるが、ことをより煩雑にしかねない。当該二本が松井本系列に近い位置にあることは疑いがないので、松井本系列の範疇をより広げる(具体的には、現在の松井本系列判定の指標から、当該二本が該当しない項を除外する)ことで、当該二本を松井本系列中に組み入れる処置が伝本派生の実情にもよりそぐうものではないかと判断した。松井本系列認定の目安を八項に絞るもう一つの理由は、管見に入った伝本の範囲においては、上掲の八

項を満たすことが、松井本系列と判定し得る必要十分条件になると考えたためである。犬井氏の掲げられる項目とは多少の出入りがあるが、これは、松井本系列の欠く部位がそれほどに多いことを意味している。

上掲八項目を選んだ基準は規模の大きさである。しかし、①は規模が小さい。にもかかわらず、敢えて①を採り上げた理由は以下の通りである。該系列の伝本中、蓬・神・原・龍は取り合わせ本であり、これらについては上巻頭から三分の一もしくは前半部が考察の対象となる。しかるに、松井本系列を特徴づける現象は後半に顕著である。規模の大小を基準として松井本系列の共通事象を選んだ場合、それは後半に集中することになり、前半のみが考察対象となる前掲の取り合わせ本については判別の指標が得られない。これを考慮して、規模は小さいが上巻においては最も顕著な現象である①を加えた。

「この松井本系列には、誤脱も生じてはいる。が、必ずしも誤脱とは言えず、あるいは故意の省略かとも思える欠文が、

かなりの数に上つて」おり、「これが、この松井系列の本文の特徴と言つてよい」との犬井氏の見解が妥当であることは、上掲八項の多くが、修辭的な美文を欠くものであったり、簡略化を意図するものである事実から確認される。

該系列の場合、津・院を加えたために、他系列のような画然たるグループ分けは難しいが、しいていえば、所属の十二伝本はその親疎関係によつてさらに松・九・蓬・神・原・実と玄・昭・早・龍のグループ及び院と津に区分することが可能である。各々のグループについては便宜的に松グループ、玄グループと仮称する（神・原は蓬の写しであるため、蓬を以て代表させる）。

まずは、松グループについて述べる。該グループに共通する現象を次に掲げる。

- ① 御ミす二三けんはかりあけられて雲井の月を匂いらん
ありけるになをえたる月なれハへきらうきんは三五の夕
といひなから⁵（1—9）²
- ② ミやうねんの秋のころかならすほうきよなるへしその

- ゝち世の中でのうらをかへすかことくなるへし(2—7)
2
- ③ しょゑのくわん人ひやうちやうをたいし四部六部のけ
んひいしらかつちうをよるひきうせんをたいしちんとう
に候けり(4—2)
2 9
- ④ はるかにみたしてゑミさせ給てためともすてにまいり
て候まことにゆゝしきつわ物にて候けり(5—0)
2 3 1
- ⑤ しかるにいま廿六代の御門をのこしたてまつりてたう
きんの御門に王法のつきなん事こそくちをしけれ(5—
2 9
1 1)
- ⑥ 日をのふるなら八人はともにつかれてかせんよハかる
へししからハこの御しよをハきよもりなとにしゆこせさ
せられ候へ(6—3)
2 5
- ⑦ せいほうらいけきのいをふるひていさミすゝミてうち
出しすかたことからあハれ大しやうくんやとそみえし(6 7
2 1 2)
- 本文引用は玄に依る。④について、松グループは傍線部を
「ハるかにみハたせハ」(松に依る)とし、他については傍線

部を欠く(②の場合、松グループは「うら」を「うち」
とする。また、蓬は「ミやうねんの」の「の」を欠く一方、「て
の」を有するなど、小異がある)。この中、①②⑥(③も加え
るか)は目移りなど不注意による欠脱と推測されるが、④⑤
⑦は意図的省略かもしれない。なお、③については津、⑤⑥
については院、④については津・院が松グループと同じく傍
線部を欠いているので、これらは松グループにのみ共通の現
象ではない。

玄グループについても、これらが近い関係にあることは次
の事例に依って確認される。

- ① 人王七十六代にあたりたまへるみかと代まつせにおよ
ひくらあハ如来におとり給へるうたひの御身おもちなか
ら(1—4)
2 7 1
- ② 御めのくれさせ給ひけるにこそとをのく袖をそしほ
りけるミつやあるのまむとおほせありけれハ(0—3)
3 7 1 3
- ③ 六良とのかいの人々をあひそへて山道をさしふさき
七郎とのか九郎殿をハしなのゝせいをあひそへてほくら

くたうにさしむけ (3 1
3 2)

④ きりたてまつらんとハしたまふそたすけたてまつるま

てこそなくともせめてハかくと申てさいこの御ねんふつ

をもすゝめたてまつりたまへかしといひけれハかまたこ

とハりとやおもひけんさらハわたのそのやうを申たまへ

といふあひたよしみちくるまのなかへにとりつきてなく

く申けるハ (4 2
3 4)

⑤ さのミ野山にふさん事も物うく覚てあるかた山寺にた

ちより (8 5
3 1)

本文引用は松に依る。④を除く各々において、玄グループ

は傍線部を欠く（ただし、龍は前半部のみが宝徳本系統本文

であるため①のみが、早は下巻だけが現存するので⑤のみが

該当）。④については、玄は傍線部を欠くが、昭は、相当部を

「きりたてまつらんとハし給ふそたともとにとりつきてなく

く申けれはかまだこれをきゝ」としている。この点につい

ては後述する。①の場合は省略も疑われるが、他は不注意に

因って生じた欠脱と考えられる。上記共通現象を以てこれら

四本が相互に近い関係にあることが確認される。

津・院を除く松井本系列所属の伝本について親疎の概要を

記した。これら二グループの性格について述べるなら、松グ

ループの場合、共通する七項中、不注意による欠脱と見られ

るものが①②⑥（③も加えるか）、意図的省略かとも思われる

ものが④⑤⑦となる。一方、玄グループでは、五項中、①以

外は不注意による欠脱であることが明らかである。この事実

を見る限りでは、玄グループには不注意による欠脱がやや多

いのに対して、松グループは意図的省略の度合いがいくほど

か濃いといえるだろうか。小字句に着目した場合でも、きわ

だった差異は認められないが、いずれかといえば松グループ

に省略が目立ち、玄グループに誤写が多い傾向が見られる。

以下、各々の伝本の性格について見てゆく。まずは、松グ

ループに属する松・九・蓬・実について述べる。本文の純良

性を探る目安の一つとして、各本が固有に欠く二十音節以上

の部位を計数すると、松八、九一、蓬〇、実七となる。

右の数値が示す限りにおいては、大規模な欠脱（もしくは

省略)がないという点で、蓬が最も信頼すべき本文を備えているようだ。該本にはごく小さな欠脱や誤字がいくほどか見られるが、目に付くほどの固有字句は特に見いだされない。

この点で蓬は善本と判断される。ただし、先に記したように、該本は取り合わせ本であり、宝徳本系統を伝える部分が全体のほぼ三分の一という限界を持つ。また、松井本系列に属する伝本の多くは平仮名を多用するが、その中において蓬は漢字表記の目立つ伝本である。その中には不適切な漢字使用も少なくない。いくつかを例示すると、

- ①下(自他) $\begin{pmatrix} 2 & 8 \\ 2 & 0 \end{pmatrix}$ 漢朝(閑中) $\begin{pmatrix} 2 & 8 \\ 2 & 0 \end{pmatrix}$ 、③宣旨(せん事) $\begin{pmatrix} 2 & 9 \\ 2 & 0 \end{pmatrix}$ 、④黒鰐(黒つ羽) $\begin{pmatrix} 2 & 4 \\ 2 & 0 \end{pmatrix}$ 、⑤床(瑜伽) $\begin{pmatrix} 6 & 2 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$ 、⑥僉議(先規) $\begin{pmatrix} 6 & 2 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$ 、⑦光悦(黄鉞)

等が挙げられる。各々、上が蓬、()内が適正な本文である。

①は、自他↓した↓下、②は、閑中↓かんでう↓漢朝、③は、せん事↓せんし↓宣旨、④は、黒つ羽↓くろつは↓黒鰐、⑤は、瑜伽↓ゆか↓床、⑥は、先規↓せんき↓僉議、⑦は、黄

鉞↓くわうゑつ↓光悦、と蓬の誤りに至る過程が推測され、いずれも、蓬の前段階に仮名表記本文が想定される。人名表記についても、政廉(将門)、則長(教長)など、同様の現象が認められる。この事實は、元は平仮名表記であったもの(仮名表記の多い伝本は少なからず現存する)に蓬(もしくは蓬をいくほども遡らない祖本)が、独自の判断で漢字を当てたことを示しており、蓬はこの点に関しては本来の姿から離れていると考えるべきだろう。

松グループ中では、実・九が特に近い関係にある。

- ① かやうに候はん|に|はいかなるよろひをきてこのもんへ
ハむかひ候はんするそ $\begin{pmatrix} 7 & 7 \\ 2 & 2 \end{pmatrix}$
② ゆみやとらせ給ふ人につきつかへ申ものゝかゝること
にあふへしとハかねてそんちしたる候とのうたれさせ
給ひ候ハ $\begin{pmatrix} 8 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$ (実は傍点部「み」)
③ へいけてういをそむけハけんし|これ|他本により補
う)をたいらくへいしのらうとうけんしをいすけんしの
らうとうへいけをいすハかつせんあるへしや $\begin{pmatrix} 8 & 2 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$

本文引用は松に依る。上掲各項について、実・九はともに傍線部を欠く。そのすべてが恐らくは目移りによる欠脱と推測される。この他にも実・九両者の間には小字句のレベルでの合致が認められることから、両者の親近性が確認できる。

本文の純良性の面から注目すべきは九であろう。該本の場合、二十音節以上の欠脱は左の一箇所のみである。

なんそかうかやつとならんとひけれハかうういかり

をなしてきしんおころせりといへり（略）たいりへまいる

へきふしのけミやうお御執筆にしるしをかせ給ふよしとも

よしやすよりまさのふかすさねとし以下五人なり（4—5）
2 4 7

本文引用は松に依る。九は傍線部を欠く。頼長入洛の途中から、崇徳院と後白河帝との書簡のやりとりを経て、鳥羽院の遺命披露の途中までが存在せず、そのため文意が通じなくなっている。欠脱規模がほぼ一丁分に当たることより推測するなら、書写の際、二丁を一度にめくったことに欠脱の原因が求められるのではないか。いずれにせよ不注意に起因している。

大規模欠脱はこの一箇所のみであり、これ以外には全体的にごく小さな字句の誤りが見られる程度で、総体として善本と判断される。上述の大規模な欠脱がその本文的価値を低めていることが惜しまれる。

次いで実に移る。該本については旧稿で述べた^②。いまその要を取ると、二十音節以上の欠脱（もしくは省略）は左掲の七箇所である。

① そのきしきとしくかわることハなけれどもことしハ
御なうによりてとめらる（1—4）
2 5

② 所々につけられたりけるあいた八りうとそなつたる
ハりやうのよろい（の—他本により補う）中にことにひ
さうのてうほうなり（6—10）
2 6 1 0

③ あなをひたゝしのい勢やとていきつきぬたりしもつけ
のかみ八郎とおもひておくしてそさはおほえつらん（8—8）
2 8

④ あはのつほねかもとへとおほせありけれハ二てう大ミ
やへ仕てたつねけるに門をとちてたけともをともせず
1 1

さらハ左京の大夫かもとへとおほせられけれハ(略)さ

らハせうないしかもとへとおほせありけれともそれにも

人もなかりけり $(1-10)$
 3

⑤ 御なミたにむせはせたまひけりかのそふかこ国に没せ

しつゐにかんていのれうかんをはいす $(2-10)$
 3

⑥ 朝家の御かためとなり君の御まほりともならせ給はん

や(とー他本により補う) かきくときなみたをなかしけ

れハ $(5-10)$
 3

⑦ らうせきをしつむへきよし被仰下けれハ兩人ともにあ

とかなきよし陳し申す $(7-9)$
 4

本文引用は松に依る。①く⑦の各々において、実は傍線部を欠く。④の場合、実の欠脱規模は松で数えて四行強に及ぶ。

九・津もまたその中の二重傍線部を欠くが、恐らくは「おほせ」の目移りに起因するものだろう。実の場合も「おほせありけれ」の目移りに因る欠脱と思われるが、九・津とは無関係に生じたものだろう。

該本には、この他にも欠脱や誤字が相当数に亘って見られ

る。このことより、総体としては、本文的に九より幾分劣る位置にあるかと思われる。

松は上述の蓬・九・実の三本とは少し離れた位置にある。

該本の場合、二十音節以上の欠脱(もしくは省略)は八箇所を数える。

① かうわ五ねん正月十六日御たんしやう同とし八月十七

日くわうたいしにたゝせ給ふかせう二ねん七月九日ほり

かわのみんなくれさせ給ふ $(1-4)$
 3

② くふの人々にハくわんはく殿ない大しんさねよし公さ

ゑもんのかミもとさね $(7-2)$
 0

③ 身をかくしをきてにうたうかならん様にこそきゝはて
給ハめあひかまへて一しよ落へからす $(3-10)$
 3

④ まとひいてにし女はうたちしかのやまこえ三井寺など

へこそとおほしめされしかとも $(7-5)$
 3

⑤ 入道殿下御なみたをなかせたまひて左府うせ給ひて
のちハ $(7-2)$
 7

⑥ 所のちうミン等にいたるまでもよほしあつめ三百よ人

をしよせて四重五多にをしこみ (8 7
3 5)

⑦ 何事をか申へきとて物もいはすきこゆる為朝多ひらん

あらんとて周防判官秀実うけとりてきたのちんをわたす

8
3 8 1 1

⑧ 御手跡はかり都へ帰入せたまはん事いまくしそのう

へいかなる御ぐわんのむねありてかおほつかなし (9 9
3 9 1

3)

本文引用は便宜的に玄に依る。各項において松は傍線部を欠く。③については省略も考えられるが、他の場合は傍線部がないと文脈を追う上で支障が生じるため、目移りなど不注意による欠脱と推測される。この他に次の項も加えてよかるう。

当世のしゆくらうにてわたらせ給へハ君もしんもはぢた

てまつてこそわたらせましますに (1 1 1
3 4

右についても松は傍線部を欠くが、これも「わたらせ」の目移りによる欠脱と判断される。当該部については、宝徳本系列の東が傍線部を含む周辺をより広範囲に欠くが、松との

間に関連性はないだろう。上記の如く、グループ中、松には大きな欠脱数が最も多い。その他にも小さな誤りが散見しており、本文的に優れているとは言い難い。ただし、改変性は希薄であり、その意味では、松井本系列の最大公約数的な姿を伝えていると言えようか。

いずれにせよ、これら四伝本は各々難点を持ち、いずれか一本が卓越して純良な本文を有する事実は見あたらない。

次いで、玄グループに属する玄・昭・早・龍について述べたい。まず、各本が固有に欠く二十音節以上の部位を計数すると、玄一、昭五、早一、龍三となる。

昭の場合、二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）五箇所は左の如くである。

① やまとのかみよりちかに五代中つかさの小輔よりちか
かまこしもつけのかみよりひろかちやくし (3 9
2 4

② かねこかふとのてへんにてをかけてひきあをのけん
とするとところにかねこぬいてもちたるかたなゝれは (9 6
1 6

- ③ しんゐん御かつせんにうちまけさせたまひてゆくかた
しらすおちさせたまひぬときこえけれハ富家禪定殿下左
府きんたちひきくしたてまつり (1—4)³
- ④ かきくとき身つから髪をきりあまたにゆひわけ仏神三
ほうにたむけたてまつり河の中へそ入てける (6—7)⁶
- ⑤ 命をうしなひ給ふことハなし皆さまをかへすかたをこ
そやつし給ふなれ (6—5)⁷
- 本文引用は松に依る。各々において、昭は傍線部を欠く
(④は松井本系列のみの共通異文だが、昭は「かハのなかへ
いりなんとの給ひけるイ
○そ入てける」と、行間に校異を記す)。①②④は欠脱と
思われるが、③⑤については意図的省略の蓋然性もある。
- この他に、系列内でのみ固有との条件下では、以下の三項
が加わる。

- ⑥ しん院と申ハ御あにたいりと申ハ御おとゝなりくわん
はくとのハ御あにさ大しん殿ハ御おとゝなり (3—3)¹
- ⑦ 八まんとのを主とたのまぬものやハありしそのこにて

- ましましては入道とのも我らかしうそのこにてましましてハ
こそ頭殿も主なれ (4—1)¹
- ⑧ 追号ありて崇徳ゐんとそ申ける「ミやしけひと親王を
ハ御出家後けさう院のほうゐんけんしやうと申き (4—1)¹
- 右のいずれにおいても、系列内では昭のみが傍線部を欠く
が、系統全体を見渡した場合、⑥については宝徳本系列の東
が、⑦については陽明本系列の大・国が同じ部位を欠いてい
る。⑧については東が当該部を含む周辺を大きく欠く。いづ
れの場合も不注意に因る欠脱と思われるが、⑧の場合、昭と
東との関連は考えられない。⑥⑦の場合は、昭と各々の伝本
との間に関連があつたか、あるいは偶然の一致であるかは分
からない。

昭には上掲以外にも十音節を越える欠脱（もしくは省略）
がいくつか見いだされ、中に意図的省略かと思われるものも
含まれる。また、全体を通して固有の小字句も比較的目に着

く。そうしたもののいくらかを左に示す。

① まついのちをすてゝちうをはけまさん²（7—8）⁴

他本は「まついのちをすてゝさうあるなり」（松）、もしくは「まづいのちをすつへきなり」（大）といった記述を持ち、傍線部表現は昭特有である。

② やハあなたへつといとをしてかぶらハ大ぢにさつとち³る（9—9）

他本は「矢ハあなたへつといとをして大地にたつかぶらハこなたへこけてさつとちる」（松に依る。以下同）の如き形を持つ（国はこのあたり欠脱）。昭は他本の如き形の傍線部を取捨して組み替え、抄略を図つたものか。

③ のとのかたへさかさまにこそいたてけれふしきなりし⁶事ともなり（0—1）³

他本は「のとのかたへさかさまにたつたりたゝ事ともおほえす神箭などにやあるらんとそあやしミあへる」とする（ただし、玄・龍は「のんどのかたへさかさまにとそあやしみあへる」（玄に依る）と簡略、恐らくは前掲文

の傍線部を欠落させたものだろう）。昭は独自の行文。

④ しんめんおほせなりけるハいまこのミの事ハおの⁸くしるへからす（0—2）³

他本は傍線部を持たない。傍線部はなくてはならないものではないが、あれば懇切とはいえる。

⑤ すけながあそんを御つかひとしてにんわじへせんげな⁹りけるハ（6—8）³

傍線部、他本は「進せられて」「被参て」などとしており、昭のみ固有の表現を取る。

些細ではあるが、時に昭にはこうした独自表現が見いだされる。また、次に示す事例も該本の固有性を端的に物語るものではないか。

とうごくのともがらおほくつきたてまつるといふもひとへにためよしの御かけぞかししかるにまさしきちゝのくびをバいかてかきらせ給ふへき

玄を除く他本は、相当部

東国のともからおほくつきたてまつるといふも入道との

「御さうそく也さこそちよくめいおもしといふともまさし
きちゝのくひをはいかてかきらせたまふへき（松に依る。

伝本間の小異は無視）（4—1）
3—1

と記す。両者ともに文脈に問題はないが、昭のめいささか趣を異にしている。当該文は、為義を闇討ちにと謀る鎌田を制止する波多野の言の一部だが、昭の場合、波多野が主人を「ためよし」（他本では「入道との」と呼び捨てている点に不自然さがある。一体、昭の形はいかなる経緯で生まれたのだらうか。それを探る鍵が玄にある。相当部を玄に求めると、玄の場合、「とうくくのとまからおくつきたてまつるといふともまさしきちゝのくひをはいかてかきらせ給ふへき」と、丁度他本の傍線部を欠く形を伝えている。この場合、他本の形が本来で、玄は、恐らくは「といふも」「といふとも」の目移りにより傍線部を欠落させたのであろう。この事実を以て憶測するなら、玄と同グループに属する昭においても、その親本（もしくはそれをいくほども遡らない祖本）の時点で既に玄と同じ欠脱を生じていたのではないか。そして、この不備

に気付いた昭（もしくはそれをいくほども遡らない祖本）の筆者が、独自の行文をもって文脈の飛躍を埋めた。そのゆえに、昭は当該部において固有本文を持つことになった。このように考えることはできまいか。

次に掲げる現象もまた同種のものとして捉えられる。

（為義を—稿者補足）きりたてまつらんとハし給ふそと
たもとにとりつきてなくく申ければかまだこれをきゝ
（為義に向かつて—稿者補足）いまたしらせ給ひ候ハすや
同じく、鎌田が為義を闇討ちにしようとするのを波多野が
制する昭の一節である。玄を除く他本では、相当部

きりたてまつらんとハしたまふそたすけたてまつるまで
こそなくともせめてハかくと申てさいこの御ねんふつをも
すゝめたてまつりたまへかしといひけれハかまたことハリ
とやおもひけんさらハわたのそのやうを申たまへといふあ
ひたよしみちくるまのなかへにとりつきてなくく（為義
に—稿者補足）申けるはいまたしらせたまひ候ハすや（松
に依る。伝本間の小異は無視）（4—4）
3—2

とある。昭は簡略だが、両者ともに文脈に問題はない。ただ、為義への報告者が他本では波多野であるのに対し、昭では鎌田になっており、さらに、波多野が「とりつ」いたのが他本では「くるまのなかへ」であるのに対し、昭では鎌田の「たもと」になっている。相当部を玄に求めると、該本では「きりたてまつらんとハし給ふそたすけとりつきてなくく申けるハいまたしらせ給ひ候はすや」とあり、他本の傍線部を欠いた形と一致している。傍線部がなければ文脈に飛躍が生じるので玄は欠脱を生じていると判断される。そして、この場合も、昭の親本（もしくはそれをいくほども遡らない祖本）で既に玄と同じ欠脱を生じていたが、昭（もしくはそれをいくほども遡らない祖本）の書写者が、独自に本文を補足して現在の形に整えた。それが昭の固有性となったのではないか。

上記の推測が認められるなら、昭は、文意の通じない箇所については、私意を以て本文の補足を行っている伝本ということになる。とすれば、該本は系列中ではいささか個性が見られる伝本といえそうだ。

付言すれば、昭には、ごく一部に他系列と符合する事実が見いだされる^③が、他系列との間に接触があったか否かは判然としない。

次いで玄の場合、二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）は左の一箇所である。

結句左府流箭にあたり給ひ新院配所へをもむかせおハし
まし凶徒皆誅せられ（8—11）^{3 4}

本文引用は松に依る。玄は傍線部を欠くが、省略か不注意に因る欠脱であるかは分らない。これ以外に次の二項も欠脱（もしくは省略）に加えてよいのではないか。

① 東国のともからおほくつきたてまつるといふも入道と
のゝ御さうそく也きこそちよくめいおもしといふともま
さしきちゝのくひをハいかてかきらせたまふへき（4—11）^{3 1}

② 手を合念仏お申せとおしへけれハ三人のおさあひ者と
も又めをふさきにしにむかひ手を合父ハいつくにわたら
せたまふそとて（5—9）^{3 9}

①は、前に昭の固有性を論じる際、とりあげた部位である。

玄の場合「といふも」「といふとも」の目移りに因る欠脱と推測される。ただし、昭にも玄に近い形が見えているため、厳密には玄における二十音節以上の固有欠脱とはいえないが、敢えてとりあげた。②も、七頁他で取り上げた箇所である。

この場合、資以外の陽明本系列並びに宝徳本系列の宝・東は傍線部全てを欠き、玄は二重傍線部のみを欠いている。ただ、これらと玄との間に関連性はなからう。

玄には特別の改変性は認められないので、親本に忠実たることを目指した伝本と考えられる。ただ、小さな字句の誤りが全体に亘って比較的多く見られるので、多少杜撰な面があるといえるか。

早の場合、二十音節以上の固有欠脱は左の一箇所である。

関白殿へ被仰遣関白殿かしこまりてうけたまはり候ぬ但
ちゝを配所へつかわしてその子撰祿として朝務にあひまし
はり候はんこと忠臣の札にあらすしからは忠通か関白辞表
をめしをかるへきか (8—5)
3 3

本文引用は松に依る。早は傍線部を欠き、文脈に飛躍を生じている。顕著な欠脱は右の一箇所にとどまるが、下巻のみの残欠本であるため、この事実をもって純良性の指標とすることはできない。ただ、下巻に三箇所固有欠脱（もしくは省略）を持つ昭に比べれば、それよりは信頼し得る本文を有するといえるか。なお、該本には僅かながら微細な固有記述が見いだされる。⁽⁴⁾

次いで龍の場合、二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）は左の三箇所である。

① くわんはくお左ふにつけらるゝかしからすハ又内覧氏
のちやうしやをたゝみちにつけらるゝかこのりやうてう
よろしくてんさいあるへきとしきりにうたへ申させ給
けれハ (2—6)
2 7 1

② とをからむものおハさしおよひちかゝらむやつをハカ
たてうちにきつておとしなきおとしはらいおとしちかつ
かんものおハかいつかんで (5—6)
2 4

③ きやうふの少輔（さた—他本により補う）のりとねり

のかミ家行中つかさのこんのせうす多い多⁽⁷⁰⁾
27—5

本文引用は松に依る。各項において龍は傍線部を欠く。①

③は不注意による欠脱と判断されるが、②については意図的省略も考えられる。

この他に次の事例も加えるべきか。

しつふをきとみまいらせてまいれとてつかはさるもりの
りいそき帰参して此よしを申ければ左大臣殿さらハとてい
そきまいらせ給ふたゝし我御身ハあやしけなるハリこしに
やつれたまいて^(4—2)
24—6

同じく龍は傍線部を欠く。当該部については、四十三頁に記したように、資が「つかはさる」から「さらハとて」までを欠いている。従って、厳密には龍における二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）ではないが、資との間に関連性はないと思われる。なお、この場合、不注意に因る欠脱か省略かは分からない。

該本の場合、全三巻中、上巻頭より中巻半ばまでが対象となるが、その中に二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）

が三箇所見いだされ、また小さな字句の誤りも比較的多く目に付く。純良性という点からはさほど重視される伝本ではないといえそうだ。なお、玄との間に比較的顕著な共通欠脱（もしくは省略）が存在することより、玄に最も近い位置にあると見られる。⁽⁵⁾この他に松井本系列の諸本とは異なり、陽明本系列の陽グループと符合する欠脱が一箇所見られる⁽⁶⁾が、他の部位には該グループとの交渉を思わせる節が見いだされない。偶然の一致ではないか。

最後に院・津について述べる。まず院の場合だが、該本は、宝徳本系統本文の後に京図本系統の為朝説話を追補した伝本であり、宝徳本系統本文部が考察の対象となる。該本の性格についてはかつて考察した⁽⁷⁾。その際は、松井本系列に近いが四系列のいずれにも属さない伝本として扱ったが、小稿においては、本節の初めに述べた理由により、松井本系列に属する一本と捉えたい。該本の性格把握については旧稿と変わるところがないので、旧稿の要旨を記した上でいくばくかの補足をしたい。まず、旧稿での検討結果を要約するなら、

① 従来の松井本系列諸本が共通に欠く本文を院が有する事例がいくつか認められる。

② 独自の欠脱や省筆並びに固有本文が見いだされる。

③ 京図本系統の本文を部分的に採りこんでいる。

となる。①について補足すると、前掲の、松グループ並びに玄グループが共通に欠く部位を、院に突き合わせた場合、松グループが共通に欠く七項では、④⑤⑥を同様に欠くが、①②③⑦については、欠脱（もしくは省略）が認められない。従って、①②③⑦において院は松グループに比してより本来的な姿を残しているということになる。また、玄グループが共通に欠く五項についてはすべて欠脱のない姿を伝えている。この事実によれば、院は、松グループ、玄グループのいずれよりもより整った姿を少なくとも部分的に伝える伝本であるということになる。さて、院における上記現象をいかに把握するかが問題となる。これについては、蓋然性として二様の捉え方があり得る。一つは、従来の松井本系列に属する一本（その本が現存本中にあるか否かは問わない）を根幹と

し、他系列の本文を以て補填・整備を行ったとする見方、いま一つは、松井本系列のより初期的な姿（宝徳本系列の如きから松井本系列に移行する過渡形態と言い換えてもよい）を部分的に伝える伝本とする見方である。このいずれが正しいかの判定は困難ではあるが、後者の把握の方が無理がないように思われる。

断言はできないが、該本については、松井本系列の初期形態を少なくとも部分的に伝える伝本を主たる母胎とし、京図本系統本文をも一部に取りこみ、かつ僅かながら固有本文をも組み込んだ伝本と捉えてよいのではないか。なお、二十音節以上の固有欠脱（もしくは省略）は次の四箇所である。⁽⁸⁾

① まいるましきていに返事を申ければのりなかをもてか

のしゆく所へつかわされてめされければはうくわんい

てむかひて² (4—4)

② そのかすおほしといふとも思にさこそ候らめためよし

このせいをもてなとかふせかても候へきもしかなひかた

くして³ (7—4)

²

- ③ 入道なくく³のたまひけるハこんとの大しやうくんを
うけたまはりしもわか身ハおひのすゑなれハたとひおも
ひてありとも^{3 3}
³（3—5）
- ④ 河をわたらんとしけるまきれにこしのうちよりはい出
て人にもしらせすいしをふところひろひ入て^{3 4}
^{3 6}（6—15）
- 本文引用は松に依る。各項において院は傍線部を欠く。①
②は不注意による欠脱の可能性が高く、③④については省筆
の確率が高いか。この他に左の三項も加えるのではないか。
- ⑤ てきハわつかのこせいなりみかたハ大せいなくくひを
取てハむねんなりいけとりもつともたいせつなり^{2 3}
^{1 2}（3—6）
- ⑥ 子とも立帰りてちゝをよひ返す子ともおもひきりてゆ
きければちゝ又子ともをよひかへす^{3 4}
³（3—2）
- ⑦ おなしみちにこそとおほしめすともめいとへをもむき
ぬる人二度あふ事なし六道四生まちく^{3 6 7}
^{1 6}にわかれて（6—7）
- 本文引用は同じく松井本に依る。各項、傍線部が院にはな

い。いずれについても省筆か不注意に因る欠脱かは分らない。松井本系列中では院のみが欠いているが、系統全体を視野に入れた場合、⑤は陽明本系列の国も同部を欠いており、⑥は宝徳本系列の河と欠く部位が一部重なる（陽明本系列は異文）。また、⑦は陽明本系列も同部を欠いている。これら符合が偶然の一致か、院とそれぞれの系列もしくは伝本との関連を示すものであるかは分からない。

この他にも、院には小さな欠脱が比較的多く存在しており、杜撰さも孕んでいるため、古態の評価には慎重さが要求されよう。

次いで、津について述べる。該本が従来の四系列細分では松井本系列に最も近いが、該系列と異なる因子をも無視できない程に有する伝本であることは旧稿で述べた。⁽⁹⁾松井本系列諸本が共通に欠く部位十八項を津に突き合わせると、十二項が合致し、六項が異なる。このことより、津は、従来の松井本系列諸本からは院よりも離れた位置にあるといえる。が、本節の初めに述べたように、小稿では該本もまた松井本系列

に属する一本として扱うこととする。

院の場合に倣い、まず、松グループ並びに玄グループが共通に欠く部位を津に突き合わせると、松グループが共通に欠く七項中③④を同様に欠くが、他は欠脱（もしくは省略）を生じていない。また、玄グループが共通に欠く五項については、すべて欠脱（もしくは省略）のない姿を伝えている。この事實は、該本が、松グループ、玄グループのいずれよりも整った本文を伝える部位が院よりも多いことを示している。

津に関する稿者の認識は旧稿における見解を出るものではない。旧稿での論旨を略述するなら、同系列の他本が共通に欠く部位を、津のみが他系列と同じく有する場合は相当数見られ、その中、二十音節以上の規模のものは十箇所を越える。

中で、最大規模のものは小学館本にして十行に及ぶ。さらに、津には、同系列の他本と異なり、他系列と一致する記述がいくほどか見いだされる。こうした事実より、津は従来の松井本系列諸本に比して、格段に整った本文を有することが確認される。従って、この場合も、上掲現象を如何に捉えるべき

か、院の場合と同じ課題がしかもより大きく立ち現れてくる。

すなわち、津を、従来の松井本系列に属する一本を根幹として、他系列の伝本を以て本文の補填ならびに置き換え操作を行った伝本と見るか、或いは、宝徳本系列の如きから松井本系列が派生するその過渡形態を院以上に濃厚に残す伝本と見るかということである。この場合についても断定は困難だが、

津が系列内の他本と異同を見せる部位において、特定の伝本もしくは系列との間に一貫した親近性が見られない事実（陽明本系列との符合がやや目立つようだが、陽明本系列の特異性が反映されていないことより、該系列の本文を採り込んだとは考えられない）から、津が松井本系列の初期形態を残している方と見る方が穏当と思われる。なお、該本には、二十音節以上の欠脱は三箇所見いだされる

① 新院のたうしの御所ハとはのたなか殿なりこゐん此御所にてほうきよなりしうへ（ $\begin{smallmatrix} 3 & 1 \\ 2 & 1 \end{smallmatrix} 0$ ）

② 今度の大將におきてハなんちにたまはるちうこうをぬきんてハ日来のしよまうのせうてんお不日にゆるさるへ

きなり
2 (6—1) 3

③ あふみの国にハ佐々木のけんさうやしまのくわんしや

ミのゝ国にハよしのゝ太郎 (6—5)
2 (1)

本文引用は松による。各々について津には傍線部がない。

①は「院」「ゐん」、③は「ミの」の目移りによる欠脱と思われる、②もまた不注意に因る欠脱だろう。この他にも、誤字や小欠脱が見いだされるが、全体的には誤脱・意改の少ない本文を伝えている。

本節での考察の要点を整理すると以下になるだろうか。

一 松井本系列の諸本は、本文の親疎関係より、さらに松グループと玄グループと院と津に分けることができる。

二 松グループは玄グループより意図的省略が進んでいる。

三 松グループでは、蓬が比較的純良であるが、取り合わせ本という限界を持つ。実・九の二本は近い関係にあり、

本文的には九の方が優れている。松は、不注意による欠

脱や誤りが目立つが、固有性・改変性は希薄である。

四 玄グループでは、昭が固有性のやや目立つ伝本である。

玄は小さな字句の誤りが少々目に付くが、改変性は少ない。龍は玄に近いが、純良性を探る上で重要な位置にはない。早も下巻のみの残欠本のため、本文批判に資する点は多くない。

五 院は比較的欠脱が目立ち、また、京図本系統の本文を取りこんでもいるが、部分的に松井本系列の古い形を伝えている蓋然性がある。津は、欠脱が比較的少なく、系列の古い形を伝えている蓋然性は院よりも高い。

以上で、松井本系列についての考察を終える。犬井氏が該系列に松井本系列との呼称を与えられたのは、系列諸本中、松が最も純良であるとの判断に依ると考えられるが、小稿での考察からはそうした事実には明確化できなかった。依って、いずれを以て該系列の代表伝本とすべきかとの課題については現段階では保留としたい。

〔注〕

(1) 「金刀比羅本系『保元物語』の三系列―原金刀本追

求のノート——(「軍記と語り物」第五号 昭和四十二年十二月)の五十七、五十九頁、及び「宝徳本系統『保元物語』本文考——四系列細分と為朝説話追加の問題——」(『和歌と中世文学』 昭和五十二年)の三百二十五、三百二十六頁。

(2) 『保元物語』写本目録稿(徳島大学総合科学部「言語文化研究」第六巻 平成十一年二月)

(3) 昭が他系列の伝本と符合する顕著な事例としては、昭における二十首節以上の固有欠脱(もしくは省略)中につけ加えた⑥⑦が主要なものとしてあげられる。

(4) 早に見られる顕著な固有記述を示す。

① 三人の弟 (ミセケチ) ともあにのをしへにしたかひて

ねをなきやミナミたをそなかしけるにしにむかひ手
を合 (5 1)
3 6

傍線部は早にのみ存在する。ただしミセケチ。

② 行平の中納言いかなるつミのむくひにやもしほた
れつゝとなかめけん所にこそとおほしければいとゝ

あはれそまさりける (7 2)
3 1 3

傍線部は早にのみ存在する。なお、「おほしければ」を「おほしめし(す)」とする伝本がある。

③ ろうのことくに四はうを(を)はミセケチ)なか
へをわたしてくきつけのこしをつくり廿よ人してか
き (9 1)
3 0 1 1

宝徳本系統の他本は「籠の如二四方を打つけたる
輿を造てのせ四方二轡をわたして廿余人して昇て」

(宝に依る)(影 6 8)としており、早は独自表現
をとる。なお、院も「籠の輿四方を打つけ作りての

せ四方になかへをわたして廿四人してかき」とあつ
て独自。

(5) 龍・玄における符合の顕著なものとしては、他本
に「のとのかたへさかさまにたつたりたゝ事ともおほ
えず神箭などにやあるらんとそあやしミあへる」(松
に依る)(0 1)とある部位、龍・玄ともに傍線部
を欠く事実があげられる(龍は、傍点部「こそ」)。

（6） 龍が陽明本系列の陽グループと符合する顕著な事

例として、他本に「判官かさねて申けるは凡よろつも

のくさく候事ハ為義年来將軍の宣旨をのそミ申候しか

とも」（宝に依る）（影⁰9—6）（³4—1⁵）と見える傍

線部を、両者ともに欠く事実がある。

（7） 『保元物語』写本目録稿補遺」（言語文化研究」

第十五巻 平成十九年二月）

（8） この他、院には「○万機内覧の宣旨を下され」
抑左太左るいようせつうの家⁴に生れ

（2—1）と、二十音節を越える行間書き入れがある。
³

原本は未見だが、当該書き入れは本行と同筆のように

思われるので、欠脱としては扱わない。

（9） 注（2）の論文。

（未完）